

2009年度 福島県「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」

やまふにゅう

山舟生地区調査活動報告



2010年3月

東北大学公共政策大学院
ワークショッププロジェクトA

目 次

1. はじめに	3
2. 山舟生地区概要	4
3. 調査概要	9
4. 問題意識	15
5. 山舟生地区活性化案	19
6. おわりに	33

(巻末資料)

資料1：山舟生史	34
資料2：伊達市役所職員ヒアリング要旨	39
資料3：伊達市梁川町山舟生地区における集落機能の実態等に関する現地調査	46
資料4：現地調査で挙げられた意見	56



1. はじめに

我々東北大学公共政策大学院ワークショップIプロジェクトA（以下、「本WS」と略）は、「過疎地域の集落機能の維持向上策について」というテーマの下、2009年4月より8名で活動してきた。本WSは、集落の実態調査等を通じて集落の現場に入り込み、過疎地域の集落の現状および課題を把握し、過疎地域の集落機能の維持向上には何が必要なのかを探っていくことを目標に、主に、宮城県七ヶ宿町を調査してきた。集落の現状把握等の勉強をすすめていく中で、集落の現状に危機感を覚え、強い問題意識を持つようになった。人口減少、高齢化が進んでいる現代社会であるとはいえ、自然環境の保護につながる公益的機能や人と人との温かいつながりを有している集落の消滅や衰退を見過ごすことはできない。集落の危機的状況を打開するために少しでも貢献したいという使命感をメンバー全員が持ち、日々の活動に取り組んでいる。本WSの最終目標は、調査で浮かび上がってきた課題の解決策として、効果的かつ実行性のある政策をとりまとめ、地方自治体に提言することである。

そんな折、福島県がおこなう「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」（以下、「集落調査事業」と略）の存在を知った。集落調査事業の目的及び活動が本WSのそれと共通しており、調査委託事業に参加することによって集落の実態についてより一層理解を深めるとともに、集落の『地域力』育成・強化に貢献することができるのではないかと考え、集落調査事業への参加を志願した。そして今回、ご縁あって福島県伊達市梁川町山舟生地区に入らせていただいた。本報告書は、約7カ月間に渡る本WSの山舟生地区での活動、山舟生地区の住民の皆さんとの関わりを記録したものである。

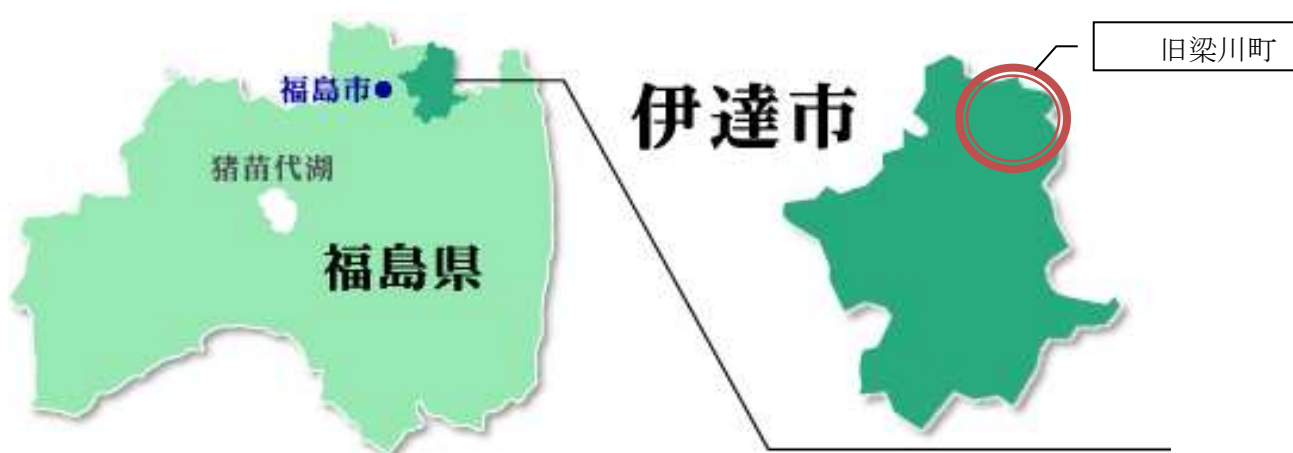


2. 山舟生地区概要

まず、本 WS が調査を行った福島県伊達市梁川町山舟生（やまふにゅう）地区（以下、「山舟生地区」と略）の概要について述べる。

山舟生地区のある伊達市は、福島県の北部に位置し（図 1 参照）、県都福島市に隣接している市である¹。伊達市は 2006 年、伊達郡の伊達町、梁川町、保原町、霊山町、月舘町が合併して誕生した。山舟生地区は旧梁川町内の集落であり、宮城県との県境に位置している。人口は 1,005 人（2009 年 10 月）、高齢化率は 30.8%（2009 年 10 月）で、旧梁川町の中心部からは約 7 km 離れた中山間地域である（図 2 参照）。山舟生地区内は 12 の町内会に分かれている。

図 1 伊達市、旧梁川町の位置



出典：伊達市ホームページ

図 2 山舟生地区の位置



出典：梁川町「やながわ 50 年の軌跡」152 頁

¹ 伊達市の概要については、伊達市ホームページ (<http://www.city.date.fukushima.jp/index.html>) を参照した。（最終閲覧日 2010 年 3 月 10 日）

山舟生地区の特産品には羽山そば、羽山漬け、あんぼ柿などがある。あんぼ柿とは、皮をむいて硫黄で薫蒸した柿を1カ月ほど寒風にさらして乾燥させたものである。あんぼ柿は大正時代、梁川町の農家が平核無（ひらたねなし）や蜂屋などの渋柿を使い、全国で初めて硫黄薫蒸して作ったのが始まりで、名前の由来は、天日で乾燥させる天干し柿（あまぼしがき）が転じたと言われる²（図3参照）。冬になると、山舟生地区のほとんどの農家の軒先にあんぼ柿が吊るされている。

図3 あんぼ柿



また、毎年行われているイベントには、4月に開催される「羽山神社の山開き」や7月に開催される「山舟生くぼたアジサイ祭り」、11月に開催される「山舟生羽山神社の山車祭り」などがある。山舟生地区には約1万株のアジサイが植えられている。山舟生地区全体をアジサイ一色にしようと、住民が協力しながら公園や地区内の道路沿い、田んぼのあぜ道などにアジサイを植えている。最終的には25,000株のアジサイを植え、ギネスブックへの認定を目標に活動が続けている。「山舟生くぼたアジサイ祭り」では、アジサイだけではなく「ペットボトル」という手作りのイルミネーションを楽しむことができる（図4参照）。「ペットボトル」とは、ペットボトルをくり抜き、その中にろうそくを灯すもので、地元住民のアイデアから始まった。この時期の山舟生地区は、ペットボトルによって幻想的な雰囲気包まれる。

また、「羽山神社の山車祭り」では、人形や花で装飾した7台の山車が地区内を練り歩く（図5参照）。山車祭りでは太鼓や獅子舞などの郷土芸能も披露される。この祭りは300年以上の長い歴史を持っており、無形民俗文化財に指定されているだけでなく、「うつくしま祭り50選」にも選ばれている。

² 参照、河北新報記事（2007年11月24日）

山舟生地区に古くから伝わる郷土芸能には羽山太鼓、除石観音獅子舞、西部笠踊り、山舟生萬才などがある。

図4 「山舟生くぼたアジサイ祭り」の様子



図5 「羽山神社の山車祭り」の様子



さらに、山舟生地区では和紙づくりも行われている。山舟生和紙がいつ頃から漉かれていたか定かではないが、言い伝えによると、文治以前、既に漉いていたとも、大阪の役の落人が教えたとも言われている³。山舟生和紙は和紙需要の激減と和紙生産者の減少によって、1980年頃に一度途絶えてしまった。しかし、長い歴史とともに受け継がれてきた紙漉き技術と業が消滅してしまうことは残念なことだという地域住民の声により、1995年、山舟生和紙を復活させた。山舟生和紙は、時代に即した用途別和紙製品づくりを目指し、研究を重ねている。現在は冬季限定で紙漉きを行い、山舟生小学校の卒業証書用紙を作るなどしている（図6参照）。

図6 和紙づくり



多くのイベントを開催している山舟生地区であるが、これらのイベントの多くは「山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会（以下、「むらづくり協議会」と略）」が主催している。むらづくり協議会は山舟生地区を元気のある誰もが住みたくするような地域にしたいとの思いから1982年に設立された。山舟生地区の全世帯がむらづくり協議会会員であり、地域が一丸となってよりよい山舟生地区づくりを目指している。

その他にも、山舟生地区には美しい田園風景が広がっており、きれいな川や、きれいな水も魅力の一つである。「山舟生」という地名は「山」と「舟」という、一見あまり関係のなさそうな単語が使われている。この地名の由来は、山舟生に伝わる七不思議にも入っている。山舟生七不思議の4つ目である「四に、新田小舟の堰」によると、昔、八幡太郎源義家が奥州征伐の際、突然神船が現われて敵軍を打ち破り、大勝利を収めることができた⁴と言われている。この伝説により、「山より船、生まれ出たる」

³ 山舟生和紙の記述に関しては、全国手すき和紙連合会ホームページ (<http://www.tesukiwashi.jp/p/yamafunyu1.htm>) を参照した。（最終閲覧日 2010年3月10日）

⁴ 山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会「伝統を継承するふるさと山舟生」

をもって山舟生と名付けたという説もあるそうだ。山舟生地区は美しい自然に囲まれているだけでなく、古くからの歴史を持った伝統ある集落である。

図7 美しい田園風景



図8 きれいな水



3. 調査概要

本 WS は、山舟生地区に事前調査、事前視察、意見交換会、祭りへの参加、報告会と、計5度入り、調査をおこなった。調査は、山舟生地区の住民の方々の視点、行政職員の視点、そして学生という外部の視点という3つの視点から山舟生地区を見直し、山舟生地区の抱える問題点や課題を洗い出すことを目的として進めていった。調査スケジュールは図9のとおりである。

図9 調査スケジュール

- (1) 事前調査 (2009年9月4日)
・・・集落代表者、伊達市役所職員、梁川総合支所職員
- (2) 事前視察 (2009年9月25日)
- (3) 意見交換会 (2009年10月10、11日)
・・・山舟生地区住民の方々
- (4) 羽山神社の山車祭りへの参加 (2009年11月7日)
- (5) 調査報告会 (2010年2月28日)
・・・山舟生地区住民の方々

(1) 事前調査 (2009年9月4日)

まず、事前調査として集落代表者と、伊達市役所職員、梁川総合支所職員にヒアリングを行い、集落の現状や伊達市の現状を伺った。ヒアリングにおける質問項目の策定にあたっては、国土交通省が2006年度に行った「国土形成計画策定のための集落の状況に関する調査」で用いた質問項目や、新潟県上越市が行った「高齢化が進んでいる集落における集落機能の実態等に関する現地調査」で用いた質問項目を参考にした。ヒアリングの具体的な質問項目と回答内容の詳細については、巻末資料2 (39～45頁)、3 (46～55頁) を参照されたい。

(2) 事前視察 (2009年9月25日)

次に、事前視察として、山舟生地区の住民の方々に羽山や採石場、山舟生和紙づくり伝承館、七不思議の伝説がある場所などの、山舟生地区の代表的な場所を案内していただいた。また、和紙づくりの行程や郷土芸能の写真やビデオもを見せていただいた。本 WS は、事前視察と事前調査で得た情報をもとに、学生が感じる「山舟生地区のよいところ」「山舟生地区の悪いところ、困っているところ」を地図に書き入れ、「山舟生地区現況マップ (図11参照)」作成した。

図 10 事前視察の様子



図 11 山舟生地区現況マップ



(3) 意見交換会 (2009年10月10日、11日)

事前準備、事前視察を経て、2009年10月10日、11日には山舟生地区林業構造改善センターで意見交換会を開き、山舟生地区の住民の方々と学生が一緒になって、山舟生地区について考えた。1日目の意見交換会では、山舟生地区の住民の方々約50名の方にお集まりいただいた。2日目には、集落の代表者の方々と学生で1日目の意見交換会で出た内容をさらに深めるという形で意見交換会を行った。

意見交換会では、事前視察・事前調査をもとに学生が作成した山舟生地区現況マップを参考に、①山舟生地区のよいところや悪いところ、困っているところを挙げてもらった。山舟生地区の現状を確認したうえで、次に、このままにしていたら②10年後の山舟生地区はどうか、10年後の山舟生地区のよいところや悪いところ、困っているであろうことについて意見を挙げてもらった。山舟生地区の現状と将来を踏まえた上で、③山舟生地区を今後どのような地区にしていきたいかという、夢ビジョンを挙げてもらった。夢ビジョンとして挙げた意見は、本WSで1枚の地図に集約し、夢マップを作成した。

意見交換会では、事前調査や事前視察では発見できなかった山舟生地区のよいところを教えていただいた。また、住民の困っていることを深く知ることもできた。さらに、山舟生地区をもっと元気にするためのアイデアも教えていただいた。意見交換会の詳細については巻末資料4(56~61頁)を参照されたい。

図12 意見交換会概要

【話し合うテーマ】

- ① 山舟生地区のよいところ・悪いところ、困っているところ
- ② 10年後の山舟生地区(よいところ・悪いところ、困っているところ)
- ③ 山舟生地区をどのような地区にしたいか(夢ビジョン)



夢ビジョンで出た意見を1枚の地図(夢マップ)にする

意見交換会の後は、両日とも懇親会を開いていただいた。1日目は山菜やあんぼ柿などの山舟生地区の郷土料理や特産品をごちそうになり、お酒を酌み交わしながら山舟生の歴史や人生の教訓など、さまざまなことを教えていただいた。また、2日目にはアジサイ公園内にある東屋において、イノシシ肉やどじょう汁、鯉の刺身など、学生達がいままで口にできなかった料理をごちそうしていただいた。獣害で農作物に深刻な被害を与えているイノシシは、臭みもなく、脂がのっけていて非常においしかったことが、大変な驚きであった。

図 13 意見交換会（1日目）の様子



図 14 意見交換会（2日目）の様子



図 15 イノシシ肉を頬張る学生達



図 16 2日目懇親会の様子



(4) 羽山神社の山車祭りへの参加 (2009年11月7日)

意見交換会の中で多くの意見が出された「羽山神社の山車祭り」を実際に見学させていただくために、本WSは、11月に行われた羽山神社の山車祭りに参加した。造花や人形などで装飾された7台の山車が地区内を練り歩く姿は圧巻であった。祭りでは、郷土芸能の「羽山太鼓」を叩かせていただいたり、餅つきをさせていただいたりした。また、野菜などの直売所の手伝いや、イノシシ串焼きの販売のお手伝いをさせていただいた。その他にも、前回の意見交換会には参加されなかった若者の方々と話をする機会を得たり、中学生の方々から羽山太鼓の叩き方を教わったりと、多くの方に出会うことができた機会でもあった。さらに、羽山太鼓を叩くという貴重な経験をすることにより、郷土芸能の良さを実感することができた。

図 17 祭りに参加した時の様子



(5) 調査報告会 (2010年2月28日)

これまでのヒアリングや意見交換会を踏まえ、本WSが作成した山舟生地区の活性化案について住民の方々へ報告し、活性化案に対する意見を伺うために、2月に調査報告会を開催した。調査報告会の詳細については、4. 問題意識で詳しく述べる。

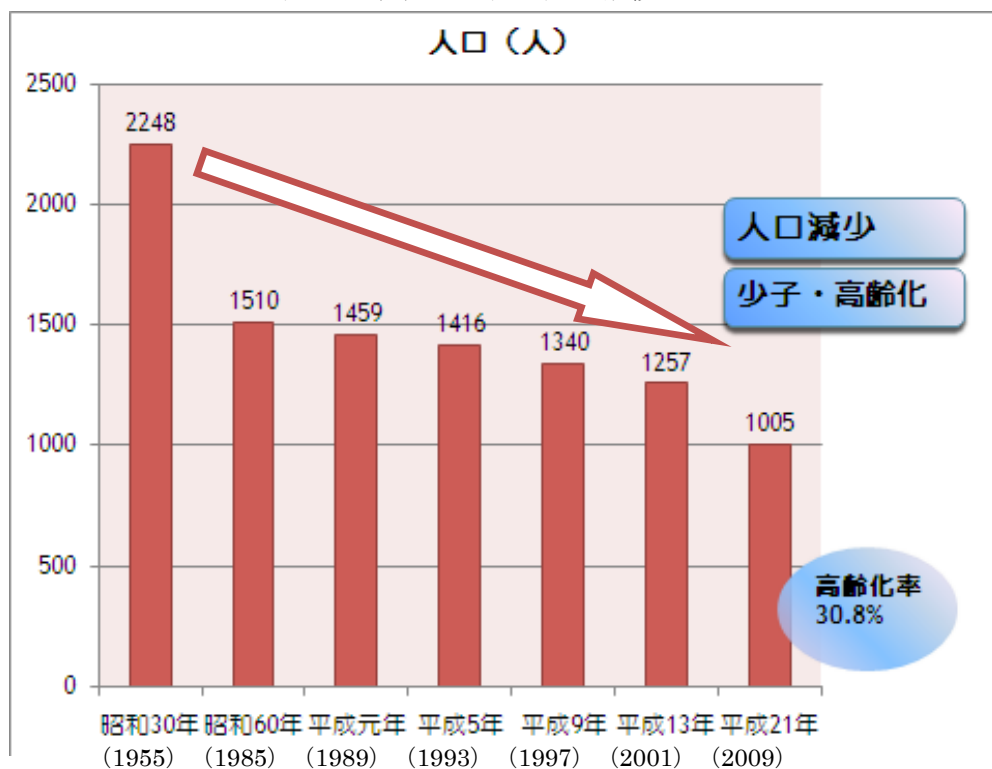
4. 問題意識

続いて、ヒアリングや意見交換会から、浮かび上がってきた山舟生地区の問題点について記述し、山舟生地区が抱える課題について考察する。

(1) 山舟生地区の人口推移

まず、山舟生地区の現状を人口推移からみていく。図 18 は昭和 30 (1955) 年から平成 21 (2009) 年までの人口推移を表したグラフである。山舟生地区は昭和 30 年頃、つまり約 50 年前と比べると人口が約半分にまで減少している。また、高齢化率は 30.8% で、福島県の平均を上回っている⁵。このグラフから、山舟生地区では人口減少、少子・高齢化が進行していることが伺える。

図 18 山舟生地区の人口推移

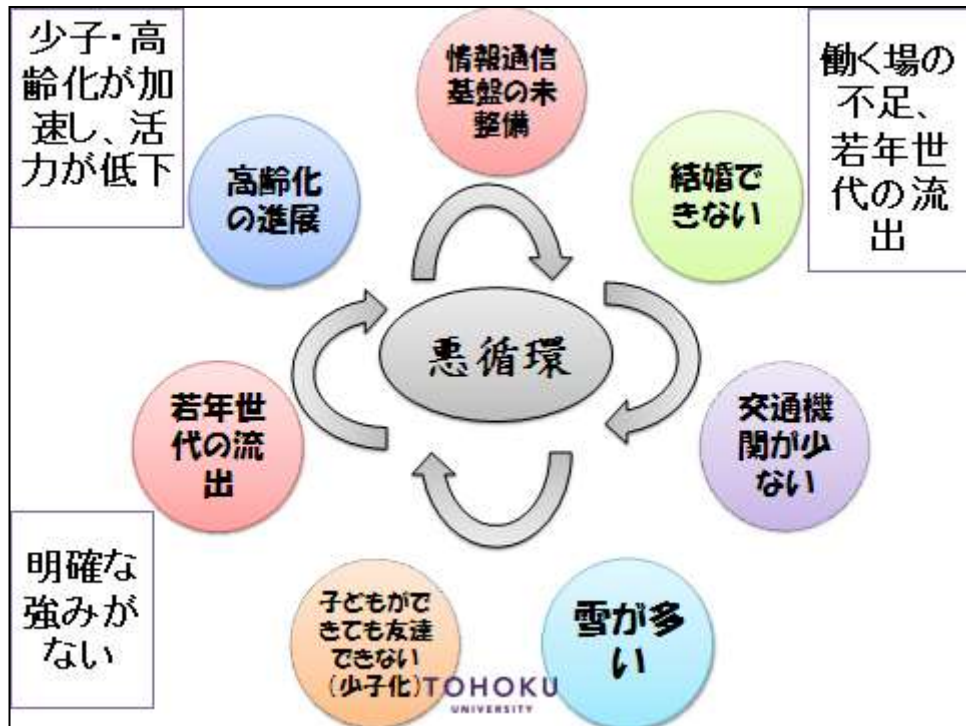


⁵ 福島県の高齢化率の平均は 24.7% であり、全国平均は 22.7% である (いずれも、2009 年 10 月 1 日現在のデータを参照した)。

(2) 行政職員ヒアリングより

次に、行政職員のヒアリングから浮かび上がった問題点について述べる。伊達市の職員は、山舟生地区、ひいては梁川地域の問題として、少子化・高齢化が加速して活力が低下していること、働く場の不足やミスマッチによって、若年世代が他地域へ流出していることを挙げている。また、地理的な特性から、伊達市は明確な強みがなく、それゆえに地域産業が育ちづらいとも指摘している。これらの問題は、図 19 にあるような、携帯が繋がらない（情報通信基盤の未整備）や交通機関が少ないといった様々な要素が悪循環を引き起こしていることが、問題の深刻度を増しているとも指摘している。

図 19 行政職員ヒアリングより浮かび上がった問題点



(3) 意見交換会より

続いて、山舟生地区の住民の方々から挙げられている山舟生地区の良い点や問題点についてみていく。意見交換会で挙げられた全意見については巻末資料 4 に載せてあるので、ここでは一部についてみていく。

図 20 は意見交換会で挙げた意見の一部である。まず、現在の山舟生地区のよいところは、人に活気や熱意があるところや、美しい自然、豊富な地域資源等が挙げられている。反対に、悪いところ、困っているところとしては老人の一人暮らし世帯、二人暮らし世帯の増加や郷土芸能の存続が困難な点等、人口減少・少子高齢化によって引き起こされている様々な問題が挙げられた。また、10年後の山舟生地区のよいところとしては、山舟生地区の伝統である和紙づくりや紙漉きは続いているだろう、また、住民が協力して植えているアジサイや三春町からもらった滝桜は成長し、咲き誇っているだろうという意見が挙げられた。一方、10年後の山舟生地区の悪いところ、困っていると思われる点については、人口の

さらなる減少、それに伴う小学校統合の恐れ、既存の行事が盛り上がらなくなるといった意見が挙げられた。これらの意見は、現在の山舟生地区で抱えている問題点の深刻度が増すだろうという厳しいものであった。

図 20 意見交換会で挙げた意見（一部）

現在の山舟生地区	10年後の山舟生地区
<p>【よいところ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 活気・熱意があるところ ・ 人が温かい ・ きれいな水、空気、緑 ・ 子育てによい環境 ・ 豊富な地域資源（柿、イノシシ、和紙、山菜、鉱泉など・・・） <p style="text-align: right;">・・・など</p>	<p>【よいところ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 和紙づくり、紙漉きは続いているだろう ・ アジサイや三春の滝桜は成長しているだろう <p style="text-align: right;">・・・など</p> 
<p>【悪いところ、困っているところ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 老人の一人暮らし、二人暮らし世帯の増加 ・ 郷土芸能の存続 ・ イノシシによる獣害 ・ （行事面などで）地区の負担が大きい <p style="text-align: right;">・・・など</p> 	<p>【悪いところ、困っているところ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 人口が 20%減少するのでは ・ 子どもがいなくなるのでは ・ 小学校が統合されるのでは ・ 行事が盛り上がらなくなるのでは <p style="text-align: right;">・・・など</p> 

(4) 本WSが考える山舟生地区の課題

ヒアリングや意見交換会の中から浮かび上がってきた問題から、本WSは、山舟生地区には大きく3つの課題があるのではと考えた。

まず1つ目は、高齢者への対応である。(1)山舟生地区の人口推移でみたように、今後も山舟生地区では人口減少、少子高齢化が進むと考えられる。今後増加するであろう高齢者の方々を地域でどのように支えていくかという視点がさらに重要となってくる。

2つ目は、若者の巻き込みである。山舟生地区は、高齢化率30.8%とはいえ、多くの若者がいる。実際、本WSが参加させていただいた祭りでも、20代~30代の若者が多くいると感じた。しかし、多くの若者が「地域デビュー」できておらず、地区の行事に参加できていないという現状がある。

3つ目は、地域資源の活用である。2.山舟生地区概要で述べたように、山舟生地区には豊富な地域資源があり、多くのイベントが開催されている。しかし、イベントを行っても観光客がお金を落とすような経済循環がないため、イベント開催ごとに地域の負担が増えてしまっている。

これらの課題を解決していくことが、山舟生地区の将来を考えるにあたって必要となる。

図 21 本WSが考える山舟生地区の課題

- ① 高齢者への対応
- ② 若者の巻き込み
- ③ 地域資源の活用

5. 山舟生地区活性化案

前述した問題意識から、本 WS は、山舟生地区の課題の解決に少しでも貢献するような活性化案はないかと考えるようになった。ここでは、活性化案作成の際に参考にした夢マップを紹介し、本 WS が考える山舟生地区活性化案について記述する。

(1) 山舟生地区夢マップ

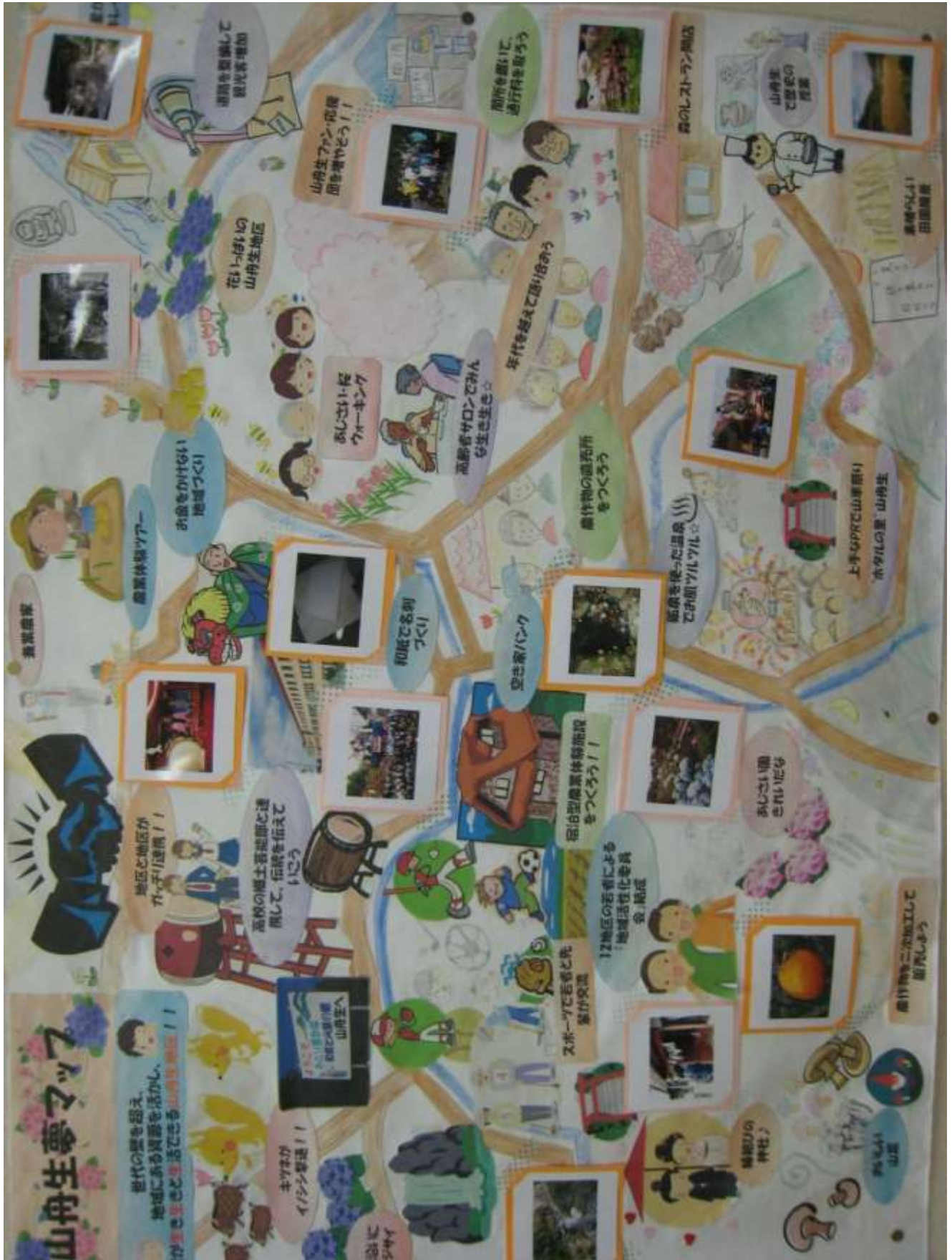
山舟生地区の活性化案を考えるに際しては、意見交換会の中で住民の方々と学生で考えた夢ビジョンを参考にした。「今後山舟生地区をどのような地区にしたいか」というテーマに対して、住民の方からは和紙を生かしたい、高齢者を繋ぐ役割の人をつくりたい、地区同士の連携を強めたい、祭りを活性化させたい、年代を越えて語り合いたいなど、多くの夢ビジョンが挙げられた。夢ビジョンの全内容については、巻末資料4を参照されたい。夢ビジョンの内容を地図にしたものが、図 23 の山舟生地区夢マップである。このように、住民の方々からは多くの夢や希望が挙げられた。

図 22 山舟生地区夢ビジョン (一部)

- ・ 和紙を活かしたい！！
- ・ 高齢者を繋ぐ役割の人をつくりたい！！
- ・ 地区同士の連携を強めたい！！
- ・ 祭りを活性化させたい！！
- ・ 年代を越えて語り合いたい！！
- ・ 宿泊型農業体験施設をつくりたい！！

・・・など

図 22 山舟生地区夢マップ



(2) 山舟生ビジョン

本 WS はまず、夢マップを現実のものとし、山舟生地区の課題を解決するための「山舟生ビジョン」を設定した。そのビジョンとは、「世代の壁を越え、皆が生き生きと生活できる山舟生地区！！」である。

「世代の壁を越える」とは、山舟生地区内の横の繋がりや縦の繋がりや醸成することを意味する。また、「皆が生き生きと生活」とは、地域資源を活かすことによって観光客等からお金を落としてもらうための仕組みをつくり、小さな経済循環を起こそうという意味が込められている。この山舟生ビジョンを達成すると、山舟生地区はもっともっと元気な地区になると、本 WS は考える。

図 23 夢マップ実現のための山舟生ビジョン

**世代の壁を越え、
皆が生き生きと生活できる
山舟生地区！！**

(3) 山舟生地区活性化案

そして、この山舟生ビジョン実現のために、本 WS は大きく 4 つに分けて活性化案を考えた。①郷土芸能のさらなる成長、発展 ②既存の高齢者サロンを拡大させた、新たなサロンづくり ③地区内外の若者の若い力で山舟生を活性化 ④地域資源の活用 の 4 つである。それぞれの活性化案の詳細について、以下、記述する。

図 24 山舟生ビジョン実現のために本 WS が考える山舟生地区活性化案

- ① **郷土芸能の成長、発展**
- ② **高齢者サロンづくり**
- ③ **若い力で山舟生を活性化**
- ④ **地域資源の活用**

① 郷土芸能の成長、発展

山舟生地区には羽山太鼓、除石観音獅子舞、西部笠踊り、山舟生萬才といった多くの郷土芸能が存在する。その他にも毎年7月に行われる久保田アジサイ祭り、毎年11月におこなわれる羽山神社秋季山車祭といった伝統的な祭りもある。アジサイ祭りは、ホテルに見立てたライトアップ（ペットボトル）を行うなどの工夫を凝らした地域の手作りイベントである。山車祭は300年以上の歴史を持っており、伊達市の無形民俗文化財、うつくしま祭り50選にも指定されている。これらの郷土芸能や祭りは世代から世代へと受け継がれ、今に至っている。しかし現在、山舟生地区では人口減少、少子高齢化の影響に伴い郷土芸能の担い手不足といった問題が浮かび上がっている。また、祭りについても財政難により行政からの助成がなくなってしまい⁶、その運営が難しくなっている。意見交換会においても、「郷土芸能の存続が危ぶまれている。」「10年後には祭は続いていないだろう。」「10年後は山車の維持ができなくなるだろう」「（祭会場が）昔は人で埋めつくされていたのに、今はお客もまばらになってしまった。」「山車をつくるにも若者が少なくて大変だった。」といった声が挙がった。

山舟生地区にとって祭や郷土芸能を存続させ、さらに成長・発展させていくことは、住民がこれからも山舟生地区で生き生きと生活するために必要不可欠である。郷土芸能の担い手不足を解消するためには絶対的な人員が必要となる。しかしながら、今すぐに山舟生地区の人口を増やすことは困難である。そこで我々は、まずは交流人口を増やすことが必要であると考えた。他地域との交流によって山舟生地区の郷土芸能ファンや応援団を育成するための案を4点提示する。

(i) 出張太鼓

出張太鼓は、山舟生地区の伝統的な郷土芸能である羽山太鼓を外に向けて発信するために、各地に出張して太鼓演奏を披露するという案である。出張太鼓の主な担い手は小学生と卒業生といった若者を中心としている。若者にとっては幼い頃から郷土芸能に触れる機会が増え、将来的に郷土芸能の担い手になることが期待されるし、外の地域の同年代の若者との交流もできる。また、若者に交じって年配の方も出張太鼓に参加するようになることで、出張太鼓が外部との交流の場になるだけでなく、内部での世代間交流の場となることも期待される。

(ii) 郷土芸能姉妹都市連携

郷土芸能姉妹都市連携は、山舟生地区のように山車祭を開催している地域と「姉妹都市」提携を結び、お互いの地域を訪問しあうことで交流人口を増やしていくという案である。山舟生地区の山車は、2009年8月1日におこなわれた「ふくしま山車フェスタ」に参加した際、山車の完成度の高さが多くの注目を集めたそうである。姉妹都市提携を結ぶことで山舟生地区の山車を他地域に発信することができ、そこから山舟生地区に興味を持つ人が増えることによってアジサイ祭や山車祭への来客数が増加することも期待される。また、他地域の郷土芸能に触れることで自分の地域の郷土芸能のよさを再発見することも期待される。

⁶ 参照、2008年伊達市ふれあい懇談会発言録

(iii)部活との連携

部活との連携とは、伊達市内や福島県内にある高校、大学の部活に協力を求め、郷土芸能部を創設してもらうことで山舟生地区の郷土芸能を学んでもらおうという、外部の若者との交流案である。とくに高校の部活と連携することは、全国規模の大会（全国高等学校総合文化祭）が行われていることもあり、創設後は活発な交流が期待される。また、ちょうど2011年度の全国高等学校総合文化祭の開催地は福島県であるので、2009年4月には福島県に全国高等学校総合文化祭推進室が設置された。行政側にとっても各地で高校生が郷土芸能部を創設するとなれば全国大会の成功にも繋がっていくことができる。この案は、住民の側は郷土芸能を教える指導者として郷土芸能の発展に関わることができ、また、高校生は全国大会出場という目標を目指して練習できるので高いモチベーションが生まれることが期待できる。住民、高校生の両者にとって大きなメリットがあり、行政との連携も視野に入れて考えることができる案である。

(iv)芸能部の創設

この案は山舟生地区内に芸能部と称する集まりを設け、高齢者が郷土芸能を練習したり披露する機会を設けることによって生きがいをつくることで郷土芸能の伝承につなげようとする案である。この案は高齢者サロンの設置とともに進めることが期待される。住民の方が集まる機会を利用して郷土芸能を練習することで横のつながりが醸成し、いずれは若者や他地域の参加者を呼び込むことで世代間交流、他地域との交流が期待される。

② 高齢者サロンづくり

山舟生地区は人口が2248人（1955年）から1016人（2009年）と50年で約半分に減少し、高齢化率は30.8%（2009年）と増加している。このように人口減少、高齢化が進む山舟生地区では高齢世帯が増え、老人1人世帯、老人2人世帯が増加しつつある。これからの山舟生地区がさらに元気な集落となるためには、人生の先輩である高齢者の方々がこれからも元気に生き生きと生活できる環境を整えることが求められる。意見交換会においても、「老人の1人暮らし2人暮らしの増加で高齢者が大変。」「介護の問題が大変になってくる。」「高齢者はデマンドタクシーなどのサービスの利用方法を知らず、教えてくれる人も周りにいない。」「（10年後は）子どもの数はますます減少し、高齢化が進行する。」といった声が挙がった。

山舟生地区では1962年に設立された「長生会」という老人会があるが、それだけでは高齢者への対応が不十分である。今後さらに高齢者が増えることを考えると、高齢者が安心して生き生きと生活していくことのできる環境を整え、また、高齢者同士のつながりを築き、安心して生活を送ることができる必要がある。

現在、山舟生地区にはサロンが2箇所設置されており、高齢者の方々が集まってお茶を飲んだりお話をしている。意見交換会2日目において、集落代表者の方々からは「サロンの場所を増やしたい」という意見が聞かれた。そこで我々は、高齢者のためのサロンづくりに際しての4つの案を提示する。

(i)共同住宅内でのサロン

この案は意見交換会で出された「高齢者が安心して住めるような共同住宅を設置したい」という夢ビジョンに対応するサロンである。高齢者が居住する共同住宅内にサロンを設置し、入居者の憩いの場とする。

(ii)若者との交流サロン

この案は高齢者と若者の交流を図るサロンである。サロンの設置場所は農協の一角や公民館、分館、空き家を想定している。まずは月に2回ほど高齢者で集まる機会を設け、集まりの習慣をつけていく。その後集まる頻度を増やし、集まってお茶を飲むだけではなくお茶菓子や郷土料理を一緒につくるなどの作業にチャレンジしてみる。その後、若者も巻き込んで昔ながらの郷土料理を若者に伝えたり、反対に若者から今どきの料理を教わったりする場とする。高齢者も若者も、お互いが教える立場、教わる立場となり、世代を越えた交流を楽しむことができる。

(iii)郷土芸能サロン

この案は、サロンで郷土芸能をたしなむというものである。サロンの設置場所は農協の一角や公民館、分館、空き家を想定している。サロン内に芸能部と称する集まりを設け、高齢者が郷土芸能を練習したり披露する機会を設けることによって高齢者の生きがいをつくることを目的としている。この案は郷土芸能の成長・発展にも寄与することが期待される。住民の方が集まる機会を利用して郷土芸能を練習することで横のつながりが醸成し、さらには若者や他地域の参加者を呼び込むことで世代間交流、他地域との交流が期待される。

(iv)子どもとの交流サロン

この案は高齢者と子どもの交流場となるサロンを設置するという案である。山舟生小学校内にある空き教室をランチルームに改良し、高齢者と小学生が給食を食べながら交流をしたり、高齢者が教える側となって「総合的な学習の時間」の際に山舟生の歴史や文化を小学生に伝承する。また、サロンに高齢者がいることで放課後の時間は放課後児童クラブのような役割を成し、高齢者と小学生で昔ながらの遊びに親しんだりもすることができる。

③ 若い力で山舟生を活性化

現在、過疎化が進行した地域ではお年寄りが多くなり、年齢構造がアンバランスになっているという傾向が共通してみられる。それらの地域では、高齢者が多くなることで各々の集落で行われてきた自治会やその他集まり、また、集落内の祭りや趣味の集まりなどの維持運営が難しくなっていき、次第に開催頻度が減少していくことにつながる。実際、多くの集落が「自治会などが運営できない」、「祭りが維持できない」といった問題を挙げている。この山舟生地区でも、伝統の山車祭りが数年間中止に追い込まれた時期があったことは記憶に新しい。

そのため、過疎集落対策として地域内の若い担い手を巻き込んでいく取組みは、重要な緊急課題としてその必要性が広く叫ばれている。また、地域外の若者をいかに地域内に取り込んでいけるかということも地域の自立や活性化の面から強化していくべき課題として重要となってきた。

そのような中、山舟生地区では過疎化が進行し高齢化率も高くなってはいるものの、まだ地区内に若者がある程度残っている状況にある。若者中心の消防団も組織されており、らっば隊も新たにできるなど一定のまとまりを持った活動が見られる。さらに、今年10月に開催された意見交換会には山舟生に住む若い方々も数名参加してくれるなど、若者が地域の活動に関わっていこうとする姿勢がみられ、今後の山舟生の担い手としての活躍が期待されている。

しかしその一方、意見交換会では高齢者の方々から、「山舟生の若者は自らの仕事に忙しいのか、地域デビューできていない」などの声も聞かれ、若者が地区内で存在感を発揮する機会が不十分である現状もみえてきた。意見交換会内では、各住民の方々からの思い思いの意見から、その背景をうかがい知ることができた。今回私たちは、今後の山舟生の担い手として期待される若者の力が地域内で発揮されていないという点を解決すべき重要な問題ととらえ、4つの案を提案する。

(i) 若者主体の新たな組織づくり

この案は、地区内の若者が主体となって新たな組織を設けるという案である。消防団などの既存の組織から新しく作ってもいい。「若者・地域活性化委員会」などの名称で組織を新しくつくる。その組織の作り方は、消防団長や若者の中心的な人物でも若者とネットワークを持っている人間が行うといいかもしれない。その人が、地区の若者に少しずつ声をかけていって、少しずつ若者の間で地域の問題を解決していく雰囲気を作っていく。たとえば、朝ソフトをやる中で、地区の問題や地区の将来を話す機会を持ってもいい。地区の中で、ある程度地区の将来に関して話し合いができるような人数が揃ったら、新たな組織をつくる。そして、少しずつそのネットワークを大きくしていくことが望ましい。

(ii) 若者主体での温泉付き民泊施設づくり

この案は、山舟生地区に温泉の源泉である鉱泉があることからでた案であるが、簡易な足湯程度でもそのような施設をつくることによって、山舟生に立ち止まってもらうことを期待する案である。この案の良い点としては、この活動がそのまま地域の活性化につながるという点である。簡易でも温泉施設が作られることによって、アジサイ祭りを見に来たお客さんが一息つける場所になれば、話題性も上がる。若者が主体で、温泉を活用した活性化案を具体化できたら、一つの成功事例として、今後も活性化策を進めやすくなると予想できる。

(iii) 若者による伝統芸能の継承

この案は、既存のイベントにて行われている伝統芸能を若者が担っていくというものである。山車祭りや羽山太鼓がある。仰々しいお祭りは全国各地である。しかし、それは地域の歴史と密着しているからこそ、いいのである。地域の伝統を若者が担っていくということは、地域の歴史を若者が作っていくことに他ならないため、若者が伝統芸能を引き継ぐことにはとても意義がある。具体的には、お祭りに参加してもらうことである。また、若者組織の中で、伝統を絶やさないという共通認識をつくっていくことが大事である。

(iv) 地域外部の若者の呼び込み

山舟生地区には、様々なイベントがある。しかし、これらのイベントは、長年同じような固定化したイベントであり、なかなか新しいことがなされていない。そこで、既存のイベントに若者のアイデアを生かした取り組みを採用し、外からも若者が参加できるようなイベントにする。これは伝統を重んじつつ、革新を進めていくというものである。地区の将来は、若者が担っている。その若者が、お祭りをより良くしていこうと取り組むことで、イベントにも活気が出てくると考える。

④ 地域資源の活用

地域資源の活用をもって地域の活性化を行うことは、住民の郷土愛の醸成や地域外のファン層の拡大、雇用創出による地域経済の活性化などの効能があり、大変有益である。幸いにも山舟生地区には、数多くの活用可能な地域資源が存在しており、地域資源の活用を図るかたちでの地域活性化策を実現することが可能な状況にある。しかしながら、現状では地域資源が“素材”のまま散らばっているために、地域活性化に十分に活用できておらず、また地域資源が“素材”のまま散らばっているために、今後の活性化策も見え辛いという現状がある。そこで、活用可能な地域資源を整理し、地域資源の競争力の向上を図る取り組みを行うことで、“素材”としての地域資源を“地域活性化に貢献できる”地域資源へと変化させる必要がある。

このような地域資源の加工を通じ、山舟生地区の地域資源の商品力の向上を図り、地域の活力を向上させ「皆が生き生きと生活できる山舟生地区」の実現を目指す。

(i) あじさいウォーキング、あじさいマラソン

既に一定の成功を収めているアジサイ祭りの成熟を進める。また、アジサイ以外にも将来的に百花繚乱となることを期待される三春の桜をイベントへと成長させる。アジサイや桜といった山舟生の自然を活かした「山舟生ウォーキング行事」を花の美しい春、緑の生い茂る夏、柿がおいしい秋と、季節ごとに実施することで集落の活性化を目指す。



(ii) ブランド和紙名刺づくり

和紙の希少性や独特の風合いを生かしたエグゼクティブ（高級志向）層対象の「高級ブランド名紙産業」をコミュニティビジネスのような形態で興す。高級感を売りとするのが「山舟生ブランド」を育成することへとつながり、かつコミュニティビジネスのような形態で事業を展開し外部発信を行うことで地域の一体感をさらに高め、集落の活性化を目指す。また、コミュニティビジネスを通じ、若者層の雇用の確保を目指す。

(iii) 和紙づくり体験

一般的な日本人にとって身近な存在では無くなってしまった和紙を和紙作り体験を通じ、身近な存在へと変えていく。また右の体験を通し、地域内外の人々に地域資源でもあり、日本独自の文化でもある

和紙に親しみを感じてもらおうと同時に山舟生地区の伝統文化の継承を行う。伝統文化の継承をイベント事業とすることで地域資源の存続と山舟生地区の外部への発信を同時に実現し、集落の活性化を目指す。

(iv)森のレストラン

強烈なインパクトをもつコックさんと食材を「森のレストラン」を開店して外部へ発信することで、山舟生地区を外部へアピールすることを目的としている。「森のレストラン」を通じ、山舟生地区を外部へ発信することで地域外からの関心を集め、それらの関心を他のプランへと結合させることで集落の活性化を目指す。

(v)イノシシのコンビニ弁当

イノシシは山舟生地区唯一の食材では無いが、コンビニ弁当というカタチで提供すること試みは新鮮なものであり、山舟生独自の取り組みと成り得るものである。コンビニにおける商品化は、若い世代の興味関心へとつながることが期待される。そのためイノシシ弁当を通じ、若者に山舟生地区の魅力を広めることが可能となり、山舟生地区への観光客の増加を見込むことが可能となる。若者の興味関心につなげることで、地域ブランド力を高め、観光客増加につなげることで集落の活性化を目指す。

(vi)あんぼ柿のスイーツ

あんぼ柿は山舟生地区唯一の食材ではないが、地域を代表する特産品の一つである。そこであんぼ柿をスイーツに加工し付加価値をつけることで、他の地域との差別化を図る。さらに、加工による付加価値の増大とともに山舟生地区の地域経済の活性化を目指す。また、あんぼ柿スイーツを用い、山舟生地区のブランド化を目指す。また、あんぼ柿スイーツを用いた地域経済の活性化に伴い若者層の雇用の確保を目指す。

(vii)“ホタルの里” 山舟生

自然に囲まれた田舎ならではの地域資源であるホタルを地区に戻していく活動を進める。都市部ではほとんどみられないものであり、日本全体で見ても大変貴重な資源であるといえる。まずは、地区内で強化ポイントを定め、そのポイントを“ホタルの住み家”とすべく環境整備を行っていく。その際には、住民全員で環境美化に取り組む必要があるため、地区の宣言のようなものを定めて、住民が一体となって環境整備を進めていくこととする。ホタルの住む環境整備に外部の人々が関わっていくこと、また、ホタルを見たいという外部の人を取り込んでいくことで交流人口を増やし、集落の活性化を目指す。

(4) 取り組みによって得られる効果

これらの取り組みを行うと、どのような効果が得られるだろうか。まず、他地域の交流という観点からは、山舟生のファンや応援団が増え、既存のイベントの参加者、観光客の増加が期待される。そして、イベントの活気が増し、お金を落とす経済循環も生まれ、ゆくゆくは山舟生のファンの中から山舟生地区への定住者が出てくるといいサイクルが生まれるのではないかと、本 WS は考える。また、山舟生地区内を見てみると、今まで以上に世代間交流が活発となることが期待される。そうすると、山舟生地区は今まで以上に活気のある地区にあることができると、本 WS は考える。

(5) 活性化案実現のために・・・5ヶ年計画の策定

これまで述べてきた活性化案の実効性を高めるために、本 WS は5ヶ年計画の策定を提案する。活性化案の実現のためには、単年度ごとに計画を立てるのではなく、長期の見通しを立て、計画的なまちづくり運営を行うことが必要である。長期の見通しを立てた上で、1年ごとに住民の方々と話し合い、その都度計画の見直しと修正を行っていくと、よりよいまちづくり運営ができるのではないだろうか。実際に、山口県周南市鹿野渋川地区⁷や、新潟県長岡市小国町法末地区⁸では、集落計画を策定することで、まちづくり運営がより活発になっている。本 WS は5ヶ年計画の策定を提案するにあたり、例として各活性化案に関する5ヶ年計画を策定し、山舟生地区の方々にお渡しした。山舟生地区のまちづくり計画策定にあたり、本 WS の考える5ヶ年計画が少しでも貢献できれば幸いである。

⁷ 参照、現代農業 2008年11月増刊『集落支援ハンドブック』（農文協、2008年）86～95頁

⁸ 参照、岡田知弘・にいがた自治体研究所編『山村集落再生の可能性』（自治体研究社、2007年）72～88頁

(6) 調査報告会

本 WS の調査の成果として作成した前述の活性化案を、2010 年 2 月 28 日に山舟生地区の住民の方々にお集まりいただき、報告した。会では、本 WS の山舟生地区での調査報告を行った後、本 WS が作成した活性化案について、住民の方々から意見を出していただいた。図 25 は調査報告会の様子である。会では、住民の方々から次頁以降のような意見が出された。意見の中には、活性化案に対して「これはできそうだ」「これは無理そうだ」等といった、活性化案を実行に移すための貴重な意見を伺うことができた。特に、高校の部活と連携した郷土芸能部の創設については、実現に向けて山舟生地区の方々と福島県の関係者の方々、高校関係者の方々が話し合いをすすめていると伺った時は、本 WS 一同、喜びで一杯になった。一方で、本 WS が作成した活性化案は産業面についての抜本的な対策を打ち出しておらず、新鮮味がないといった意見も頂戴した。これらの厳しい意見を真摯に受け止め、本 WS の今後の課題としていきたい。

図 25 調査報告会（2010 年 2 月 28 日）の様子



活性化案に対して住民の皆さんから挙がった意見（要旨）

【郷土芸能の成長、発展】

○部活との連携（郷土芸能部の創設について）○

- ・現在、梁川高校と創設に向けた話し合いをしている。以前、梁川高校には太鼓部があったので、（練習する際の）太鼓が揃っている。4月に新学期が始まってから学生を募る予定。

○郷土芸能姉妹都市連携について○

- ・山車 2 台を整備中。太鼓や笛は勉強会を開催していきたい。

○祭りについて○

- ・女性の方々も積極的に太鼓を叩くようにし、女性の人にも楽しめるお祭りにしたい。小学校では男女皆が太鼓の練習をするのに、中学生になると止めてしまう人が多い。
- ・小学生への太鼓指導は今年の 3 月で区切りをつける。指導する中での夢は、子どもたちが佐渡へ渡ること（「鼓童」に入ること）だった。しかし、山舟生の太鼓は全国レベルからははなはだ遠い。終わったと思ったから CD を作成した。太鼓は血を吐くくらい練習しないとダメ。
- ・太鼓は発表する場があると練習にも熱が入るのでは。
- ・太鼓連盟に入るのも手だが、そのためには演奏曲が 2、3 曲ないといけない。

○和紙について○

- ・和紙開発については、1 社、1 個人から問い合わせがある。個人の方はパリコレに出品している人で、レース生地と和紙との融合を目指している。（和紙についての問い合わせは）地元からは来ない。

【高齢者サロンづくり】

- ・健康維持のためのサロンは作るつもり（現在も 2 地区にサロンがある）。サロンがない地区は、集会所の老朽化に対する耐久工事が終わり次第取りかかる。県の社福協でも推奨している。
- ・サロンはやっていることはやっているのだが、参加者は 70 代ばかり。もうちょっと若い人が参加してくれればよいがなかなか・・・。逆に「私年だから（参加しない）。」という人もいる。
- ・サロンで服用している薬の話をするだけでもよい。交わること、心と心の繋がりが大事。これから高齢者の 1 人暮らし 2 人暮らしが増えるが、「1 人じゃないんだ」ということを確認する場が必要。
- ・高齢者の方々「子どもに世話になるのは 3 日でよい。」と言う。お年寄りはがんばっている。我々よりも自立心が強い。自立心は世代が下がるにつれて柔くなってくるのでは。
- ・年代に応じた施策をしないと共同住宅、共同生活は難しい。

○共同住宅内に設置するサロンについて○

- ・学生はどのようなサロンを想定しているのか？風呂やトイレも共同では皆がケンカする。高齢者皆で生活することは難しい。各人の空間がないとダメ。部屋の区切りがあって固有のスペースを確保し、「隣の人」にならないと共同住宅は難しい。その上で顔を合わせることができる共有スペースがあるとよい。

○若者による伝統芸能の継承について○

- ・郷土料理を教え合うことは、年に何回かやってみたい。

【若者の巻き込み】

- ・太鼓を叩ける人はたくさんいるのに、祭りに来ない。世代交代がうまくいっていない。父ちゃん世代が「来いよ」と言わない。
- ・あらゆる団体の世代交代がうまくいっていない。
- ・役員の中に若者を巻き込んでいけばよいのでは。
- ・（若者の意見）先輩方の意見はごもっとも。自分は親父に「出てこい」と言われるので来れている。
- ・（若者の意見）こういう（皆が集まる）場に来られることが地域交流。この場に出るにしても声がかからないと来づらい。
- ・若者がこのような場に来るためには、自立していること、勇気を持っていることが必要。
- ・東北大学のある先生は山形県最上郡の戸沢村（月山の麓）を気に入り、空き家を借りて6年間住んでいるらしい。その先生が言うには、地域の人と話し合いをしていると、自然とリーダーが入ってくるそうだ。戸沢村では人口の3倍ほどの人が農業体験（無農薬農業）をしている（角川里の自然環境学校）。コースにして売り出している。
- ・「リーダーをやれ！」と、若い人に強制すると上手くいかなくなる。
- ・先輩がしめ縄づくり等を若い人に教えている。
- ・若い人が都会に流れているのは、山舟生地区が都会から地理的に離れているから。福島市の職場に通うにしても職場の近隣にアパートを借りることを雇用の条件に付けられることもある。地区内にいる若い人をあてにするのではなく、地区外の人を巻き込み、定住してもらうことが必要。

【地域資源の活用】

○アジサイウォーキング、アジサイマラソンについて○

- ・梁川では「三浦弥平杯伊達市梁川ロードレース大会」をやっている。山舟生にも、かつて箱根マラソンに出た方がいるので、その人の力を借りて進めていけるのでは。
- ・アジサイは25,000株植えて日本一になることを目標に植えてきた。目標が達成されればギネスにのり、「ブランド」になる。そうすればアジサイウォーキングも可能になるのでは。地域の結束力が必要だ。
- ・アジサイは50株を剪定するのも2時間くらいかかる。ボランティアだけでは日本一は難しいのでは。かといって、シルバー等で雇用していくというのも無理なのでは。

- ・山舟生小学校に赴任した先生が地層を見つけてくれた。その断層はぜひ見てほしい。

○“ホタルの里”山舟生について○

- ・ホタルの里づくりは以前からやってきた。ホタルの住みよい環境のためにはきれいな水・空気を粗末にしないことが重要。ホタルのいる地域は水や空気がきれいな地域だから。

○イベントについて○

- ・羽山神社の山開きもアジサイ祭りも一時の人集め。
- ・今はネットの時代。イベントに執着するのではなく、いかに人を呼び込むかを考えていくことが必要。
- ・今後の課題は衛生面。トイレ一つも設置できない状況では価値がない。

○その他○

- ・伊達市長が「丸森町の農地付き空き家バンクみたいなものを伊達市でも実施したい。」と言っている。
- ・会津大学の教授が「空き家も資源の一つ」と言っていた。山舟生は仙台市からしてみれば仙南地域と言ってもよい。定年の人を呼び込んで定住してもらおう。週末には孫も来る。活気が増すのでは。
- ・山舟生には磨けば価値のあるものがたくさんある。環境負荷のないものを活用していきたい。
- ・セツ釜には千本松や舟の形をした石があるので、そこに施設を作って活用してもいいのでは。遊歩道など。採石場をイベント会場にしてみてもどうか。
- ・山舟生は昔からきれいな水が流れていた。しかし、高度経済成長期にダムが建設されて以降は、かつて採れたウナギや毛ガニが採れなくなってしまった。今は魚もない川になってしまった。ダムは活水のために建設されたが、砂や石が詰まって今は効果がない。ダムを一度取り壊せばよいのでは。
- ・手作りの案内板があるが、見えにくくなっているので、もっとはっきりとした案内板にしたい。
- ・羽山に登る途中の案内板も腐ってしまった。登山道の整備等もがんばらないといけない。

【活性化案全体に関して】

- ・活性化案に「現場の声」が出ていなかった。
- ・生産について全く触れられていないことが不満。新鮮さがない。（提示した活性化案は）有り触れたこと、出回っていることだ。ものづくりには間接的にはつながっているが……。皆、ものづくりに取り組まなくなってきた。
- ・行政が追随していくような村づくりをすすめたい。その際には、村がやる部分、行政がやる部分をしっかりと5ヶ年計画に組み込んでいきたい。

~~~~~



## 6. おわりに

本 WS は、「大学生の力を活用した調査委託事業」に参加させていただいたことによって、山舟生地区に入ることができた。山舟生地区では豊かな自然と触れ合うことができた。また、山菜や柿などの郷土料理をごちそうになるだけでなく、イノシシや鹿を食べるといった、初めての体験もすることができた。そして、羽山神社の山車祭りに参加させていただいた際には、実際に太鼓を演奏することで郷土芸能の大切さを再確認した。

その中でも、山舟生地区に入って最も心に残っていることは、本 WS を快く受け入れてくださった山舟生地区の住民の皆さんの情熱や、心の温かさである。住民の方々と言葉を交わし、お酒を酌み交わす中で、本 WS のメンバー全員が、自然と山舟生地区のファンになっていた。調査終了時に、住民の方から「イベントの時だけでもいいから来てほしい。毎年来ることが分かれば準備もできるし、民泊もできる。1年ぼっきりの付き合いにはしたくない。」とあっていただき、大変嬉しく感じている。本 WS は今後とも、山舟生地区のファン・応援団として、山舟生地区がもっともっと元気になるためのお手伝いのできればと考えている。山舟生地区の方々との「出会い」をこれからも大切にしていきたい。

本 WS が調査をすすめるにあたり、多くの方にご協力をいただいた。「大学生の力を活用した集落活性化調査委託事業」の運営事務局である福島県企画調整部地域振興課の皆さま、お忙しい中、事前調査や事前視察、調査報告会の打ち合わせから機材貸出までご協力いただいた伊達市企画部企画調整課の皆さま、伊達市梁川総合支所地域づくり課の皆さまのお力添えにより、調査活動報告書を完成することができた。そして、八巻善一会長はじめ福島県伊達市梁川町山舟生地区の方々には大変お世話になった。

お世話になった多くの方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

2010年3月

東北大学公共政策大学院ワークショップ I プロジェクト A 一同



(資料1)

## 山舟生史

(福島県伊達郡梁川町『やながわ 50 年の軌跡 1955～2005 (昭和 30 年～平成 17 年)』、「山舟生むらづくり 20 年のあゆみ」(山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会)) を基に作成

| 年                   | 月日                                            | 山舟生地区のできごと                                                                                                                                 | 旧梁川町(合併後伊達市) 全体のできごと                                                                                                                                     |
|---------------------|-----------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1955 年<br>(昭和 30 年) | 3 月 1 日<br><br>3 月 1 日<br>9 月 9 日<br>9 月 27 日 | <ul style="list-style-type: none"><li>山舟生小学校校舎増築、講堂落成</li><li>この頃、山舟生では建設ブームに乗って砕石会社稼働する</li></ul>                                         | <ul style="list-style-type: none"><li>1 町 6 カ村(梁川町、五十沢(いさざわ)村、富野村、山舟生村、白根村、栗野村、堰本(せきもと)村)の合併により、新しい梁川町が誕生する</li><li>梁川町連合青年団発足</li><li>梁川青年会発足</li></ul> |
| 1956 年<br>(昭和 31 年) | 7 月                                           | <ul style="list-style-type: none"><li>山舟生竹の花橋竣工</li></ul>                                                                                  | <ul style="list-style-type: none"><li>営農相談所開設</li><li>この年、梁川町社会福祉協議会設立</li></ul>                                                                         |
| 1957 年<br>(昭和 32 年) | 8 月 14 日                                      | <ul style="list-style-type: none"><li>山舟生小中学校での学校林の手入れ</li><li>この頃、山舟生中央バス待合所建設</li></ul>                                                  |                                                                                                                                                          |
| 1958 年<br>(昭和 33 年) | 8 月                                           | <ul style="list-style-type: none"><li>2 度にわたる台風(17～18 日、26～27 日)により、山舟生川が氾濫。田畑の冠水・流失・土手決壊などが起こる。被害概算 4500 万円。山舟生地区では、中学生が復旧作業に協力</li></ul> |                                                                                                                                                          |
| 1959 年<br>(昭和 34 年) | 8 月 27 日                                      | <ul style="list-style-type: none"><li>この年、山舟生小学校でテレビ購入、以後、視聴覚教育施設が整備される</li></ul>                                                          | <ul style="list-style-type: none"><li>梁川町農協組織整備促進協議会結成</li></ul>                                                                                         |
| 1961 年<br>(昭和 36 年) | 3 月 28 日                                      | <ul style="list-style-type: none"><li>梁川・堰本・白根・山舟生・富野・五十沢の森林組合が合併し、梁川町森林組合(組合員数 824 人)が設立される</li></ul>                                     |                                                                                                                                                          |
| 1962 年<br>(昭和 37 年) | 1 月 26 日<br>3 月 1 日                           | <ul style="list-style-type: none"><li>「長生会」設立</li><li>農事有線放送開始(富野・白根・山</li></ul>                                                           |                                                                                                                                                          |

|                  |                |                                                                                                                              |                                                                                                                                                                 |
|------------------|----------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|                  | 8月             | 舟生地区)                                                                                                                        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・この年より、花火大会と灯籠流し同時開催</li> <li>・この頃、町内総生産における第一次産業の比率、45.3%、第二次 16.6%</li> <li>・この頃、町内中学校生徒数が2,272人となり、ピークを迎える</li> </ul> |
| 1963年<br>(昭和38年) | 8月<br>9月1日     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・山舟生字赤柴の上台に電灯つく</li> </ul>                                                            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・大枝を除く7農協(梁川・栗野・堰本・白根・山舟生・富野・五十沢)が合併し、梁川町農業協同組合発足</li> </ul>                                                             |
| 1965年<br>(昭和40年) | 3月<br>8月       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・山舟生地区の新橋の架替工事が完成</li> <li>・山舟生小・中学校にプール完成</li> <li>・この年、山舟生小学校で農繁休校が全廃される</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・この年、梁川町農業協同組合に東大枝と11の養蚕農協も加わる</li> </ul>                                                                                |
| 1966年<br>(昭和41年) |                |                                                                                                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・この年、町の高校進学率、63.5%となる</li> </ul>                                                                                         |
| 1967年<br>(昭和42年) | 4月16日          |                                                                                                                              | <ul style="list-style-type: none"> <li>・梁川町青年学園発足</li> <li>・この年、全地区に交通安全母の会できる</li> <li>・この年、夏秋きゅうりの指定産地となる</li> </ul>                                          |
| 1968年<br>(昭和43年) | 8月26日          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・山舟生で「赤痢」集団発生。感染者42人</li> <li>・この年、山舟生駐在所廃止となる</li> </ul>                             | <ul style="list-style-type: none"> <li>・この頃、町内繊維産業が最盛期を迎え、製造業に占める構成比、製造品出荷額で72.7%となる</li> </ul>                                                                 |
| 1972年<br>(昭和47年) | 4月1日<br>12月10日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・白根中学校、山舟生中学校が梁川中学校へ統合し、両校を分室とする</li> <li>・NHKテレビ共同受信施設白根・山舟生テレビ局放送開始</li> </ul>      |                                                                                                                                                                 |
| 1973年            | 3月17日          | <ul style="list-style-type: none"> <li>・白根中学校・山舟生中学校閉校式</li> </ul>                                                           |                                                                                                                                                                 |

|                     |                                |                                                                                                                                |                                                              |
|---------------------|--------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------|
| (昭和 48 年)           | 4 月 1 日                        | ・ 梁川中学校白根・山舟生分室廃止となり、スクールバス運行となる                                                                                               |                                                              |
| 1974 年<br>(昭和 49 年) | 3 月                            | ・ 白根・山舟生の診療所廃止される                                                                                                              |                                                              |
| 1981 年<br>(昭和 56 年) | 6 月 25 日                       |                                                                                                                                | ・ 梁川町第二次振興計画策定                                               |
| 1982 年<br>(昭和 57 年) | 10 月 12 日                      | ・ 「山舟生明るく住みよい村づくり推進協議会」設立                                                                                                      |                                                              |
| 1983 年<br>(昭和 58 年) | 10 月                           | ・ 山舟生地区高倉を対象に、地区再編農業構造改善事業が実施される<br><br>・ 新しいむらづくりへの指針である「わが地区（山舟生）のしるべ」作成                                                     |                                                              |
| 1984 年<br>(昭和 54 年) | 6 月 3 日<br>10 月 15 日           | ・ 山舟生農村広場オープン                                                                                                                  | ・ 北海道松前町と姉妹都市締結される                                           |
| 1985 年<br>(昭和 60 年) | 3 月 1 日<br>3 月 14 日<br>12 月    | ・ 梁川・丸森間の国鉄バス路線廃止。<br>梁川・山舟生間を福島交通が運行<br>・ 山舟生新校舎・林構センター・農村広場落成式<br><br>林業構造センター・・・「梁川町農村総合整備事業計画」で農村の生活環境整備の一環として建設された多目的集会施設 | ・ 町民憲章制定される<br><br>・ 繊維工業の製造品出荷額等、130 億円となりピークを迎えるが、以後減少に転じる |
| 1986 年<br>(昭和 61 年) | 2 月 4 日<br>5 月 15 日<br>8 月 5 日 | ・ 福島県内 28 番目、山舟生緑の少年団結成。自然を愛し緑を守り奉仕活動をする梁川町で最初の少年団。                                                                            | ・ アンボ料理コンクール<br><br>・ 台風 10 号の影響で阿武隈川、広瀬川などが氾濫し、甚大な被害        |
| 1987 年<br>(昭和 62 年) | 2 月 15 日                       | ・ ホワイトピア山舟生 87 冬開催                                                                                                             | ・ この年、NHK 大河ドラマ「独眼竜政宗」に梁川町が登場、政宗ブームに沸く                       |
| 1989 年<br>(昭和 64 年、 | 8 月 13 日                       |                                                                                                                                | ・ 伊達夏まつり開催。「火振山火まつり」・「やながわ踊り」                                |

|                     |                     |                                                                                                 |                                                                                                                            |
|---------------------|---------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 平成元年)               | 8月13日               |                                                                                                 | スタート。後に「ふるさとの夏祭り」へと引き継がれる<br>・伊達氏誕生 800 年記念式典開催                                                                            |
| 1990 年<br>(平成 2 年)  | 8月29日               |                                                                                                 | ・明倫館スタート、塾生は地域づくりのあり方を学ぶ                                                                                                   |
| 1991 年<br>(平成 3 年)  | 3月<br>5月2日<br>10月3日 | ・山舟生新道ノ内橋の渡り初め<br>・林道羽山線開通                                                                      | ・第三次梁川町振興計画が策定される                                                                                                          |
| 1992 年<br>(平成 4 年)  | 5月8日                |                                                                                                 | ・定住化促進総合対策事業奨励金交付。若者の U ターン・新規転入を促進するための事業で農業後継者の就職奨励金・U ターン奨励金・新始世帯奨励金・保育奨励金など 9 種類が交付される<br>・この年、梁川町農業協同組合は JA やながわと名称変更 |
| 1995 年<br>(平成 7 年)  | 11月<br>12月          | ・羽山遊歩道整備<br>・山舟生和紙復活                                                                            |                                                                                                                            |
| 1996 年<br>(平成 8 年)  |                     | ・「山舟生和紙づくり伝承会」では、山舟生小学校の児童を対象に紙すき体験会を開催する                                                       | ・この年、梁川町生涯学習計画策定                                                                                                           |
| 1997 年<br>(平成 9 年)  |                     | ・平成 9 年度～16 年度、県営事業の中山間地域総合整備事業「梁川東部地区」が導入 農業生産基盤の整備を総合的に行い、中山間地域の立地条件を生かしながら、定住促進と国土環境の保全を目指した | ・この年、JA やながわは JA だてみらいと合併                                                                                                  |
| 1998 年<br>(平成 10 年) | 7月<br>8月            | ・山舟生の「羽山」が福島県うつくしま百名山に選ばれる                                                                      | ・8 月末豪雨により、大きな被害が発生                                                                                                        |
| 1999 年<br>(平成 11 年) | 9月16日               |                                                                                                 | ・高齢者交通安全指導隊発足                                                                                                              |
| 2000 年<br>(平成 12 年) | 4月11日               |                                                                                                 | ・梁川中学校新校舎での授業開始                                                                                                            |
| 2001 年              | 4月                  |                                                                                                 | ・中山間地直接支払制度はじま                                                                                                             |

|                     |                                          |                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                             |
|---------------------|------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (平成 13 年)           |                                          |                                                                                                                   | る                                                                                                                                                                                           |
| 2002 年<br>(平成 14 年) | 3 月 31 日<br><br>4 月 1 日<br><br>10 月 22 日 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・五十沢・白根・山舟生小学校が小規模特認校となる</li> <li>・「うつくしままつり 50 選」に「羽山の祭り」選定される</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・県農業試験場が廃止となり、県農業試験場梁川支場となる</li> <li>・子育て支援センター開設し、休日保育・一時保育・放課後児童クラブ等、子育ての支援事業始まる</li> <li>・協働のまちづくり、国保病院改革、市町村合併問題をテーマに町内 8 地区で町政懇談会を開催</li> </ul> |
| 2006 年<br>(平成 18 年) | 1 月                                      |                                                                                                                   | 伊達 5 町（梁川町・伊達町・保原町・霊山町・月舘町）が合併、「伊達市」に                                                                                                                                                       |
| 2007 年<br>(平成 19 年) |                                          |                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                             |
| 2008 年<br>(平成 20 年) |                                          |                                                                                                                   |                                                                                                                                                                                             |
| 2009 年<br>(平成 21 年) | 10 月 1 日                                 | ・路線バス廃止 デマンドタクシーに移行                                                                                               |                                                                                                                                                                                             |

【町指定文化財】 合併後は

- ・羽山神社の祭り囃子（無形民俗）

神輿渡御とこれに従う屋台、神楽奉納などの行事が継承されている。屋台は集落毎に 7 台つくられ、地区内を練り歩いたあと山舟生小学校校庭で祭囃子を共演する前夜祭は圧巻。

【無形民俗文化財】

- ・観音様の獅子舞

(資料2)

## 伊達市役所職員ヒアリング要旨

作成者：東北大学公共政策大学院ワークショップ I プロジェクトA  
実施年月日：2009年9月4日

(伊達市(旧梁川町)全体について)

1. 伊達市(旧梁川町)の産業の現状(農林水産・観光・畜産・その他)及び10年、20年前と比べたときの変化をどのように認識していらっしゃいますか。
  - ・農業後継者の減少に伴う農業従事者の高齢化により遊休農地が増加した。
  - ・養蚕業が衰退し、果樹・野菜・畜産へ転換した。
  - ・機械導入に伴う効率化が図られた。
  - ・ニット産業が衰退し、その後、工業団地を造成し、企業誘致に努めた。

### 【農業】

昭和40年頃までは、養蚕が盛んで蚕都「梁川」として全国的に知られていた。

昭和35年の農林業センサスによると、梁川の総世帯数4,365戸のうち、農家2,924戸(専業農家1,376戸、従事者8,611人)。

現在(平成12年農林業センサス)では、農家数2,085戸、専業農家299戸、従事者2,235人と大幅な減少を見せている。中でも養蚕農家は1,659戸あったが、現在では10戸。今では、養蚕に代わるものとして、あんぽ柿や桃、ブドウなどの果樹、きゅうり・イチゴ・サヤエンドウ・ニラなどの野菜が多く作られている。

### 【産業別就業者人口の推移】

| 産業別   | S.30  | S.35  | S.40  | S.45～<br>S.50 | S.50～<br>S.55 | S.60  | H.2   | H.7   | H.12  |
|-------|-------|-------|-------|---------------|---------------|-------|-------|-------|-------|
| 第1次産業 | 8,598 | 6,975 | 6,512 | 5,110         | 4,564         | 3,869 | 3,169 | 2,477 | 2,243 |
| 第2次産業 | 1,736 | 2,814 | 3,858 | 3,764         | 3,889         | 4,545 | 4,843 | 4,885 | 4,579 |
| 第3次産業 | 2,399 | 2,733 | 3,236 | 3,539         | 3,711         | 3,746 | 3,913 | 4,281 | 4,487 |

### 【人口の推移】

山舟生地区

昭和30年 人口 2,248名 世帯数 329戸

平成12年 人口 1,254名 世帯数 283戸

2. 社会資本整備の点で今現在不足している点、困っている点などがありましたらご教示をお願いします。(たとえば、道路・橋 街灯、情報通信、コミュニティ施設等)
  - ・大雨等により道路の崩壊が起こり、通行止めが起こる箇所がある。

- ・幹線道路までの街路灯が不足していて、中山間地域における夜間の歩行は困難である。
- ・中山間地では上水道が普及しておらず渇水期には生活用水に不足を来す。また、ブロードバンドの接続環境も整っていない。

3. 生活面や高齢者福祉・児童福祉面、教育面などで、今現在困っている点などがありましたらご教示をお願いします。（たとえば、病院への通院に時間がかかる、デイサービスを受けたいのに受けることができない、など）

- ・病院や買い物等への移動時間が掛かる。
- ・交通手段には、路線バスがあるが、便数が少ないことや、停留所までの距離が遠いなどの問題がある。梁川エリアにおいても、10月からデマンドタクシーの運行が始まる。

4. 伊達市（旧梁川町）ではどのような伝統的祭事や伝統芸能がおこなわれていますでしょうか。

- ・くぼたアジサイ祭り、羽山神社秋季山車祭り、西部笠おどり、除石獅子舞（いずれも山舟生地区の行事）
- ・伊達のふるさと夏まつり（旧：やながわふる里の夏まつり）戦後間もなく始められた「鯉つかみ大会」（現在の魚つかみ大会）、「灯ろう流し」「納涼花火大会」（現在の大花火大会）

5. 伊達市（旧梁川町）の魅力にはどのようなものがありますでしょうか。

- ・緑豊かで、果物の生産が盛んで、おいしい果物が食べられる。特にあんぽ柿の生産高は県内有数である。
- ・今話題の戦国ブームに乗って、梁川八幡宮の整備が進められている。  
アンポ柿・・・全国1位の生産量  
ニット製品・・・繭玉を使った『まゆ手工芸品展示発表会』

6. 今後の伊達市（旧梁川町）をどのような町にしたいですか。そのためにはどのような施策等を実施していく必要がありますでしょうか。

- ・中山間地では、豊かな自然環境や伝統文化などの地域資源を生かしてコミュニティが息づく持続可能な地域社会を形成する。また、平地農村では、果樹・野菜・水稻を中心に、高品質な農産物を生産する複合農業を展開し、生産・流通・消費のネットワークが活きる田園空間を形成する。市街地は職・住が近接した暮らしやすい定住空間を形成する。

（過疎対策について）

7. 総務省の過疎懇談会等の資料によりますと、過疎が国の問題としてあげられるようになったのは昭和42年で、現在、伊達市は一部過疎市町村（旧「霊山町、月舘町」）に指定されています。旧梁川町は過疎市町村に指定されておりませんが、行政運営において過疎問題を認識することはごさいませうでしょうか。認識していらっしゃるのであれば、いつ頃から認識されているのでしょうか。

- ・霊山、月舘地区については、過疎指定がなされ自立促進計画が策定されているので、過疎対策が明確に打ち出され取り組まれてきた。旧梁川町についても宮城県境にあり、阿武隈山系の北端に



位置する白根・山舟生地区を中心に過疎化が進行しており、少子・高齢化と相まって地域振興の大きな課題となっている。このため、旧梁川町においては平成13年度策定の第4次振興計画において「地域自治組織」の育成を打ち出し、小学校区を単位とするコミュニティ施策を進めてきた。

8. (7. で認識されているとお答えである場合お答えください) 伊達市(旧梁川町)の過疎化が進行している原因は何であるとお考えですか。また、10年前、20年前と比べ、伊達市(旧梁川町)の様子はおおまかに言ってどのように変化してきたとお考えでしょうか。

- ・少子化・高齢化が加速して活力が低下している。
- ・原因は働く場の不足・ミスマッチと、医療・教育など日常生活のより便利なところへの若年世代が流出している。
- ・過疎化の原因・・・携帯の電波が入らない。インターネットができない。結婚できない(山間部には嫁にこない)。交通機関が少ない。雪が多い。子供ができて友達ができない(少子化)。と若者にとって不便が生じ、悪循環となっている。
- ・伊達市は福島市に隣り合っているし、仙台も日帰りエリア。どうにでも身が振れる。そのため、農業が副業農業の典型であり、明確な強みがない。明確な強みがないが故に地域産業も育っていない。

9. 以後、過疎問題について、伊達市(旧梁川町)にはどのような課題があり、どのような対策を実施してきたのでしょうか。また、そのなかには、伊達市(旧梁川町)独自の施策もその中に含まれているのでしょうか。その成果や課題をどのように捉えていますでしょうか。

- ・過疎地域に指定されると、過疎地域自立促進計画を策定し、1産業の振興、2交通通信体系の整備、情報化及び地域間交流の促進、3生活環境の整備、4高齢者等の保健及び福祉の向上及び増進、5医療の確保、6教育の振興、7地域文化の振興等、8集落の整備等について財政上の優遇措置(過疎債)が講じられる。旧梁川町の場合は、これらの制度の適用がないため、前記7のような形で地域自治の振興に努めてきた。
- ・舗装されていない道路は、雨が降ると砂利が流され大きなわだちができ、通行できないという被害が多発している。そこで梁川総合支所では、生活道路で舗装になっていない箇所を地域の住民で話し合い、そして地域住民で舗装する『現道舗装』を行っている。これは、市で工事費(100万円)を負担するので、住民自らで重機等を使用し舗装してもらっている。

10. 伊達市(旧梁川町)の考える過疎対策の意義・必要性は何でしょうか。

- ・地域の人口が減ってしまうことで、地域住民の生活水準や生産機能の維持が困難になってしまわないように、NPO等によるコミュニティビジネスを育て、地域住民福祉の向上や働く場の創出などを図っていかなければならない。
- ・人口が減少するに従って市の歳入も減少する。特に所得のある若者が流出すれば市民への税負担も増してくる。

11. 伊達市（旧梁川町）が実施している過疎対策は十分なものと認識されていますでしょうか。それとも、何か課題を感じていますでしょうか。

- ・過疎化を緩和し、住民が地域社会の持続可能性を自覚できるようになれば十分とは言えないと思います。
- ・雇用・医療・福祉・教育の整備等を通じ、若者が住める環境を整備していくことが必要であるが、単独では難しい。他市町村、学生等との協力の中で進めていきたい。企業誘致等も可能なのであれば積極的に行っていきたいと考えている。企業誘致・産業誘致に関しては暮らしと結びついた第3次産業をいかに創出できるかがカギとなると考えている。
- ・六次産業も検討に値するが、場所によりけりだと考える。
- ・若い人がいなくなると高齢化は避けられない。しかし、すぐに移住は難しい。まずは、交流人口から増やしていくのが現実的である。
- ・雇用の場の創出や住民の自身の創出を図っていきたい。これを実現するためには、“気づき”が必要である。

12. 伊達市（旧梁川町）が過疎対策を実施するに際して、権限や予算の面で限界を感じることはありますでしょうか。また、何か困っていること、苦勞していることなどありますでしょうか。

- ・予算と市役所組織が年々縮小される中で、更なる方策を講じるのは難しく、地域自治組織の育成・強化を図ることが不可欠と思います。
- ・合併による「周辺地化」の影響はある。現在は経過措置で合併前単位で支所業務を続けている。今までは行政＝地域と考えられていたが、今後は異なると考えている。今後は、基礎自治体は団体自治に徹しなければ地方分権の重責は担えない。しかしながら、地域自治の受け皿は必要である。そのため、地域住民が住民自治を担うために十分機能するシステムを構築する必要がある。自助・共助。昭和の大合併の反省としても。

13. 伊達市（旧梁川町）として、今後過疎対策について、どのような考えで、どのような事業を中心に進めていきたいと考えていますでしょうか。

- ・集落支援員等の配置を検討し、集落の現状とその課題について見つめ直し、集落の問題を自らの地域の課題として捉え「話し合い」を促進して地域特産品の開発等を図っていきたい。
- ・集落支援員のような人材は必要であると考えている。是非行いたい。地域を新鮮な目で見ることが可能な人材が必要である。そのため、集落外の人間で地域振興に熱意がある方が良いと考えている。役場職員が動くだけでは、市民は要望を述べるだけに留まってしまう。
- ・市民が要望を述べるだけでなく、自らで考えるためのきっかけづくりとして、市長が地区をまわる「ふれあい懇談会」を行ってきた。しかし、受け皿となる組織がまだ育っていないと痛感している。梁川地域は比較的形づくられている。
- ・「ふれあい懇談会」における結果の行政へのフィードバック方法は、あらかじめテーマが決まっているものに関しては、所管の部長や課長が同席し議論を行っている。しかし、総括はまだ行っていない。
- ・当事者意識と地域の若さはトレードオフの関係となっている。両立方法は、市としても模索してい

るとというのが正直なところ。

**14. 他県や県内市町村などで注目している過疎・過疎集落対策の取組がありましたら、ご教示お願いいたします。**

- ・市民協働推進課を中心に、地域自治のあり方と強化について検討している。
- ・まちづくりの参考にしている自治体は特にはない。なぜならば、伊達市は核の無い合併をしたためである。分散型で効率的な行政運営（指定地域自治）を目指している。欲張りではあるが、これを実現しなければ地域自治は育たないと考えている。現状では、行政が担う仕事以外のものも持ち込まれている。しかし、地域自治組織を作る上では、北上市、上越市の事例を参考にしている。また、島根の会社組織を作る事例にも興味を持っている。矢祭の事例は、地域経営のスタンスが異なる（住民＝行政）ので、参考とはしていない。地域自治と住民自治は一線を画するものである。行政の存在意義は、住民の最後の砦になり得ることであると考えている。
- ・住民自治と団体自治のつなぎ目として、地域づくり課が取り持つというものを想定している。地域づくり課は行政であり、市民の事務局という役割を担わせたい。しかし、現状ではまだ実現できていない。
- ・行政職員といえども、退職したら一市民として生活する。その時に自分の地域の担い手になるような取り組みがなければダメである。今までは、行政を職場としてしか見ていなかった。行政職員としての意味はここにあるのではないか。

**15. （過疎対策に限定せず）国の政策の中で伊達市（旧梁川町）にとってよかったと考える政策はどのようなものでしょうか（ex：直接支払制度など）**

- ・伊達市での中山間地域直接支払制度は、53 集落が取り組みをしており面積的には、田が 317.4ha、畑が 102.8ha となっています。1 年間に支払われる交付金総額は、43,598 千円となっています。農地の維持及び自然環境の保全が図られ、合わせて地域交流と活性化に役立っているものです。

**16. 過疎対策について、国や県に求める施策等がありますでしょうか。（要望、不満など）**

- ・コミュニティ維持等のソフト対策に力を入れる。また、場合によっては「コンパクト・コミュニティ」といった概念による“撤退・縮小”の対策も必要だ。
- ・伊達市の言うコンパクトシティとは、（都市に出ていなくても）それぞれの地域（エリア）で住み続けられる条件整備を行うことである。定住自立圏構想の伊達市版。小学校区内での合併はやむを得ない。

**17. 新過疎法をどんなものにしてほしいでしょうか。**

- ・今後も一部過疎地域として、指定していただきたい。（財政的な理由も含めて。）

(集落について)

18. 伊達市（旧梁川町）においては集落をどのような基準でもって捉えているのでしょうか。（「行政区」を「集落」と捉えている自治体や、「農業集落」を「集落」と捉えている自治体があります。）
- ・行政側では、行政区で捉えています。
19. 集落が果たしている役割・機能にはどのようなものがありますでしょうか。また、その機能において集落間に格差はありますか。
- ・農地等の共同維持管理、道路や水路等の維持管理、そして祭礼等の年中行事、冠婚葬祭等には集落の住民の協力が必要となっている。
20. 伊達市（旧梁川町）における集落の現状及び課題をどのように捉えていらっしゃいますか。
- ・中心地から離れた場所は、高齢化や少子化そして過疎化が進んでいる。原因は、8.に記載のとおり。
21. 伊達市（旧梁川町）の考える集落対策の意義・必要性は何でしょうか。
- ・地域の人口が減ってしまうことで、地域住民の生活水準や生産機能の維持が困難になってしまわないように、地域住民福祉の向上や働く場の創出などを図っていかねばならない。
  - ・山間部の世帯は減少傾向にある（減少せざるを得ない）。コミュニティを縮小していけば・・・。縮小することによって除雪区間も少なくなるし、交通機関の移動距離も少なくなる。⇒予算削減できる。
22. 伊達市（旧梁川町）では、集落対策として具体的にどのような事業を実施していらっしゃいますか。また、その中で町として特に力を入れている取組や町独自の取組はありますか。
- ・地域づくり支援事業交付金を予算化し、市民が創意工夫を凝らしながら諸問題に対処し、住民参画や地域間交流の推進、地域将来像の創造等の新たな住民ニーズに対応することを支援している。
  - ・（ケーブルテレビについて）ケーブルテレビを引いた経緯は、引くための環境が良く、全ての行政情報を全員に伝えたいという思いがあった。議会・入学式・運動会など地域密着型である。無料でスタートした。視聴率は50%ぐらいはいく。
  - ・ケーブルテレビの運営における横方向展開の要望は高い。しかし、ブロードバンドゼロ地域がある状況なので、光ケーブルを敷設する計画はあるが、ケーブルテレビの横展開に即つながらるわけではない。NTTの光サービスを提供しているエリアでの利用率は10~11%。高齢者が多い地域に広げても効果はあるだろうかという懸念もある上に、接続料をどうするかという点が問題である。今までは無料であったが、インターネットにのせると1万数千円であり、需要が未定である。そのため、今後調査は必要である。また、設備投資が技術進歩に追い付くのかという懸念もある。

23. 伊達市（旧梁川町）が実施している集落対策は十分なものと認識されていますでしょうか。それとも、何か課題を感じていますでしょうか。
- ・過疎化を緩和できなければ十分とは言えないと思う。地域自治組織の育成・強化が課題。
  - ・山舟生地区は上水道が未整備であり課題である。
  - ・自助・共助・公助のあり方。
24. 伊達市（旧梁川町）が集落対策を実施するに際して、権限や予算の面で限界を感じることはありますでしょうか。また、何か困っていること、苦勞していることなどありますでしょうか。
- ・予算規模縮小の中、自治体主導で対策を講じていくには限界があると思われるので、地元住民自らによる取り組みを活発化する方向を検討しなければならない。
25. 伊達市（旧梁川町）住民の中にこのままでは集落がなくなってしまうかもしれないという危機意識を感じますでしょうか。
- ・山舟生地区は、梁川地域の中心部から7キロ離れた中山間地域で、人口千人余りの集落となっている。この山舟生地区を元気のある誰もが住みたくなるような地域にしたいとの思いから昭和57年に「山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会」を設立しました。
26. 集落が実施している取組で特色のあるものがありましたら、ご教示をお願いします。
- ・山舟生では“ホテルとアジサイ祭り”を地域住民で積極的に取り組み、多くの観光客を呼び寄せている。また、毎年行われる「羽山神社の山車祭り」は地域おこしに対する住民の熱意が感じられ素晴らしいものがある。
27. 集落対策について、国や県に求める施策等がありますでしょうか。（要望、不満など）
- ・過疎法に基づく財政支援を最も国に期待している、現行過疎法からは少し変わってきたが、以前はインフラ整備一筋であった。来年度以降の過疎法で過疎地域指定されるか否かが心配である。

**(資料3)**

# **伊達市梁川町山舟生地区における集落機能の 実態等に関する現地調査**

**東北大学公共政策大学院  
ワークショップIプロジェクトA**

実施年月日：           2009年 9月 4日

## 「伊達市梁川町山舟生地区における集落機能の実態等に関する現地調査」調査項目

### 1. 対象集落の世帯等の状況について

(1) 最盛期の集落の世帯数、人口はどのくらいでしたか。(わかる範囲で)

- ・世帯数 約 329 世帯 (昭和 30 年頃) ※現在 279 世帯
- ・人口 約 人 (昭和 年頃) ※現在 1016 人

・旧梁川町が合併した年。昔は梁川村。

(2) 集落の世帯や人口が著しく減少したとすれば、どのようなことが主な要因と考えますか。

- ・家族構成の変化、昔は家族全員で養蚕をしていた。人口の東京への流出。
- ・携帯電話が通じにくい。
- ・山には好んで住まない。

(3) 最盛期と現在では集落の雰囲気、生活、行事などについてどのような相違がありますか。

- ・祭りは変わらず続けている。行事はむしろ増えている。生活は都会化した。
- ・隣近所の付き合いは希薄になっている。
- ・青年団の活動などもなくなった。ライフスタイルの変化で。わりと都会化してしまっている

(4) 最近 10 年間ほどで、他の地域へ転出した人・世帯はどの程度ありますか。また、それはどのような理由からですか。

- ・19 世帯ぐらい。
- ・利便性。学校の人数が少ない。仕事の関係で。

(5) 最近 10 年間ほどで、他の地域から転入した人・世帯はどの程度ありますか。また、それはどのような理由からですか。

- ・3 世帯。
- ・団塊の世代 山形などからやってきた。
- ・家族で山舟生に戻ってきた。

(6) 後継者の状況についてお聞かせください。(わかる範囲で)

|      |                      |                       |   |
|------|----------------------|-----------------------|---|
|      |                      | ①現在の集落の総世帯数           | 戸 |
| (内訳) | (内訳)                 | ②後継者が同居している世帯         | 戸 |
|      |                      | ③後継者がいるが、同居していない世帯    | 戸 |
|      |                      | 後継者は七ヶ宿町内に居住          | 戸 |
|      |                      | 福島県内もしくは車で1時間以内の地域に居住 | 戸 |
|      | 県外(車で1時間以内の地域は除く)に居住 | 戸                     |   |
|      |                      | ④後継者がいない世帯            | 戸 |

- ・7割ぐらい。
- ・27戸のうち、後継者がいない人は5～6戸ぐらいでは。

(6) - ①後継者が同居していない世帯の動向をお聞かせください。(③の内訳：わかる範囲で)

- ・今後、後継者が同居(帰郷)する可能性がある 戸
- ・将来は、後継者世帯の居住地へ転居するまたは可能性がある 戸

(6) - ②後継者が同居していない世帯の動向をお聞かせください。(③の内訳：わかる範囲で)

- ・後継者がよく(週1回以上)訪れてくる世帯はどの程度ありますか 戸
- ・後継者がときどき(月1~3回程度)訪れてくる世帯はどの程度ありますか 戸

(7) 高校生以下(就学中)のお子さんは何人いらっしゃいますか。 人

- ・119名(0から18歳)
- ・就学中は93名
- ・高校は梁川、保原、福島にある。

(8) 集落内に空き家はどの程度ありますか。(わかる範囲で) 26 戸

## 2. 集落の住民の日常生活等の状況について

(1) 各世帯の移動等のおもな手段はどのような状況ですか。(わかる範囲で)

①日常生活における移動手段はどのような状況ですか。

- ・世帯員の中に自家用車を使用できる人がいる世帯 ほとんど持っている (250) 戸
- ・自家用車は使用できないが、バイク、電動カー等を使用できる世帯 10 戸
- ・自家用車等を使用できず、公共交通等を利用している世帯 10 戸
- ・徒歩以外の移動手段がない世帯 戸
- ・世帯員以外の人の介助等がないと外出できない世帯 戸

②日常生活における買い物はどこにどのように行っていますか。

- ・農協
- ・お店2件(日用品、雑貨屋さん)
- ・移動販売(隣の地区、隣町から)

③病院へは普段はどこの病院へどのように行っていますか。病院までは片道何分くらいかかりますか。

- ・バスで20分、車で10分。送迎などもある。
- ・総合病院は梁川にはない。保原町、国見町にある。



④土日、夜間の病院へはどのように行っていますか。（救急の場合）

- ・救急車を利用。
- ・家族に送ってもらったりする。

(2) 防災対策等の取り組みについてお聞かせください

①自主防災組織あるいは自主的な防災対策の現状はどのようになっていますか。

- ・平成 18 年 山舟生防災会結成（12 地区全体からなる）
- ・構成メンバーは各消防団 OB、各種団体
- ・2年に1回防災訓練 防災関係の資材の備蓄 プロパン、ガス備蓄などを行う。
- ・山舟生の地盤は強い。
- ・5年前、集中豪雨で道路や畑などが流されてしまった。

②集落内の廃屋（管理者のいない空き家）等の対策の現状はどのようになっていますか。

- ・隣に住んでいる人たちが定期的に見ている
- ・ぼろぼろの家はそのままにしている。所有権の関係から、勝手な手入れはできない。

③集落内または周辺で、危険だと思われる個所（災害、交通事故、川等）はありますか。

- ・段々畑、絶壁、水害が来たときが心配。

(3) 高齢者の皆さんの生活状況等についてお聞かせください。

①特に高齢者の皆さんが日常生活で不安に感じていることはどのようなことですか。

- ・1人暮らし

②地域で高齢者の方々の見守り活動（声かけ活動）はどのように行われていますか。

- ・民生委員の人が行っている。老人会での活動が安否確認にもなる。
- ・今月から伊達市で配食サービスが開始された。週に1回 390円個人負担
- ・山舟生は希望者いなかった。

(4) 冬（雪）の対策についてお聞かせください。

①雪下ろし、玄関先の除雪等はどのように行われていますか。

- ・個人住宅の状況 特に、要援護世帯等への対応状況
- ・公民館等の公共的施設の状況

- ・サロンがある（2ヶ所）。
- ・長生会（ちょうせいかい）の活動
- ・花壇のはなうえ、除草 老人会がいちばんまとまっている。

②道路除雪についてどのように感じていますか

- ・県や町によって除雪が行われる道路の状況
- ・除雪の行われない町道や集落道などの状況
- ・温暖化の影響なのか、以前に比べて積らなくなった。1シーズンに1、2回除雪する程度
- ・市道からは遠いところは自分たちで除雪する。

(5) その他、日常生活で困っていることや不便に感じていることなどはありますか。

- ・食料等は農協でも配達をしている。
- ・有線放送が今年からなくなってしまった。

- ・携帯電話（ソフトバンク、au）が繋がりにくい。
- ・今のところ、行政無線を設置するという考えはない。

### 3. （農業）生産活動等の状況について

（1）集落の農業・林業従事者の状況についてお聞かせください。

①集落で農林業に従事している世帯は何戸ですか

（仕事として）

- ・稲作 戸
- ・それ以外 戸
- ・林業 戸

（自給自足として）

- ・飯米農家 戸
- ・それ以外 戸

- ・専業は10戸ぐらい。
- ・野菜
- ・あんぼ柿の産地
- ・養蚕は一人だけ 梁川町全体では5世帯
- ・農業と一緒に林業をやっている方もいる。

②後継者の状況をお聞かせください。

- ・日曜農業の人が多い。
- ・養蚕も今の代までだろう。

（2）昔と比べ、生産活動方法の変化により、変わったことはありますか。

例：機械化によりご近所に手伝ってもらわなくなった。

- ・今は機械なので「結」がなくなった。昔は養蚕などにおいても「結」があった。

（3）農地や林地、農業施設等の管理状況についてお聞かせください。

①農地や農業施設（農道、水路等）の管理はどのように行われていますか。

- ・中山間地直接支払制度を利用している。これはよい制度。
- ・イノシシ（獣害）が困る。

②林地の管理はどのように行われていますか。

- ・財産管理会が管理、間伐をしている。
- ・まつくいむしの後は植林していない。
- ・イノシシは農業する人が少なくなってから増えてきた。

③集落による共同作業は行われていますか。

- ・市道、県道は自治会が年に2回清掃している。
- ・川は県のクリーンアップ作戦に基づいて行っている。

(4) 耕作放棄などによる荒廃農地の状況はどのようになっていますか。(不在村地主)

- ・耕作するにも不便な地域に多い。
- ・イノシシが増えている。

(5) 農地や林地などの荒廃により問題となっていることはありますか。

- ・イノシシによる農作物への被害。
- ・桑の木が植えたままになっている。

(6) 農林業以外に集落内にはどのような産業・事業所などがありますか。その中で、この地域ならではのものはありますか。

- ・採石場がある。コンクリートに使う。
- ・和紙づくりは公民会で冬季限定で行われている。

(7) 生産活動を続けていくうえで困っていることなどはありますか。

- ・儲からないこと。

#### 4. 集落における取り組みの現状について

(1) 集落の寄り合い(常会等)についてお聞かせください。

- ・年に何回くらい開催していますか。
- ・主に何を決めていますか(協議の内容)
- ・町内会費はいくらですか。また、どのような用途に使用されていますか。
- ・町内会に関し何か困っていること、不安に感じていることはありますか。

(例:町内会が形骸化している、町内会の役職の担い手がないなど)

- ・総会1回(防災のことや年間計画、農村公園の管理について、草刈などについて話し合う)
- ・12の町内会ごとに活動  
(ある町内会では・・・花見、アジサイの選定、除草作業、市道・剣道の草刈、芋煮会、正月に市民会)
- ・町内会費は行政からの補助、寄付、他の団体と合わせて1万円くらい)
- ・町内会の会長は1年交代のため、継続した活動ができない。固定制にしないと町内の発展はないのでは。
- ・自治会長は固定されている。

(2) 集落で行う共同作業等の状況についてお聞かせください。

①現在、集落でどのような共同作業を行っていますか。

(例:農道や用水路の維持管理、お宮や共有地の維持管理、集落の美化活動など)

- ・神社は氏子の皆さんが管理している。

②以前行っていたが、人手不足等でできなくなってしまったことはありますか。

- ・これからのことはどうか分からないが、今は上手に回っている。
- ・アジサイの管理。面積が広いので大変。2haの公園の草刈が大変。大変だが、皆でうまくやっている。

③共同作業ができなくなってしまったことによる問題の発生はありますか。

・高齢化

④問題解決のためにどのような方法が良いと思いますか。

(3) 集落に伝わる祭りや伝統芸能などについてお聞かせください。(地域の文化活動)

①現在、集落で行われているものは何ですか。

・アジサイまつり 山車祭り 盆踊り 地区ごとのお祭り  
・お祭りが多すぎる(お金も時間もかかる)

②以前行っていたが、後継者不足などでできなくなってしまったものはありますか。

・少子化の影響で郷土芸能の存続が難しくなっている  
・神楽、獅子舞、西部笠踊り、羽山太鼓、漫才  
・子どもの人数が少ないところは大人が混ざって行っている。  
・郷土芸能は敬老会や秋祭り、アジサイ祭りの際に披露される。時々外から要望があり、披露している。市の無形文化財にも指定されている。

③祭りや伝統芸能を残し、伝えていくためにはどのような方法が良いと思いますか。

・興味を持ち続けていってほしい。

(4) 住民同士の相互扶助活動の状況についてお聞かせください。

①現在、冠婚葬祭時における助け合いなど集落の相互扶助活動は行われていますか。また、具体的にはどのような相互扶助活動が行われていますか。

・お葬式の準備 昔からやっている。お寺のほうで。

②以前行っていたが、行われなくなった相互扶助活動はありますか。また、その理由はどのようなものですか。

③今後も集落で必要な相互扶助活動はどのようなことだとお考えですか。

・冠婚は基本行っている。「冠」のほうはなくて困っている。  
・「結」の精神。高齢者宅の見守り。

(5) 集落における教育についてお聞かせください。

①集落内で子どもを対象にした行事等はおこなっていますか。(例:子ども会など)

・子ども会で球技大会を開催したり、海に行ったり山へ行ったりしている。

②子どもの教育について困っていること、不安を感じていることはありますか。

・少子化で複式学級になっている。  
・競争力の低下が懸念される。団体競技ができない。

(6) 集落における福祉についてお聞かせください。

①敬老会などお年寄りの活動の場はありますか。

- ・ グランドゴルフ、ゲートボールなど。集会所の掃除、花壇の除草。
- ・ 郷土芸能（婦人会が主催して高齢者をご招待）敬老の日 第2週の日曜日。
- ・ 温泉場への旅行（2泊3日）に行ったりしている。

②デイケア、デイサービス等の介護支援を利用されている方はどれくらいいらっしゃいますか。

- ・ 行っている方はいる（週に1回程度）。
- ・ どこも悪くなくても病院に行ったりしている方もいる。
- ・ サロンは2箇所ある

③福祉・介護などについて困っていること、不安を感じられていることはありますか。

- ・ たくさんある。
- ・ 合併前は敬老祝い金が80歳になると頂けたが、合併後は88歳。お祝い金が頂けなくなった。

## 5. その他集落の維持等について

(1) この地域（集落）の良いところはどのようなことですか。

①この地域の良いところはどのようなことですか。

例：自然、街並み、景観、動植物、温泉、遺跡・史跡、郷土芸能・行事、郷土料理、特産物など

- ・ 気持ちの温かい所。 「協働する」という気持ちが強い。

②この地域で守りたいもの、残したいものはありますか。

- ・ 自然、郷土芸能。

(2) 地域で交流事業等に取り組んでいる場合は、その状況をお聞かせください。また、今後必要と思われる交流事業等（助け合い・協力）はありますか。（集落内交流/集落同士の交流/都市との交流）

- ・ 祭りを通じて人が来てもらい太鼓を叩いている。グリーンツーリズムなどはないが。福島の山車フェスタに山車を持っていき、好評を得た。
- ・ ソフトバレー大会、運動会。
- ・ 都市部との交流等の意見もでていますが、財政との兼ね合いで難しい。

(3) 都市部などからの新規定住者を受け入れは行われていますか。また、新規定住者の受入についてどのようにお考えですか。

- ・ 新規定住者は大歓迎。
- ・ まだ水道が整備されていないところもある。水の心配がある。

(4) 今後の集落維持の見通し（住民の意向）についてどのようにお考えですか。（集落の在り方についてどうお考えですか。）

- (例)
- ・このまま集落を維持できる
  - ・当面は維持できるが、中長期的に見ると集落の維持が困難になるおそれがある
  - ・近い将来、集落の維持は困難になる・・・等々

- ・中長期的に見ると集落の維持が困難になる。
- ・何かやらないと気持ちまで年を取ってしまう。
- ・老人会の活動を活発にするといろいろなことができるのでは。

(5) 集落機能の低下を感じることはありますか。ある場合、具体的にはどのような点で集落機能の低下を感じますか。

(生活基盤)

- 集会所・公民館等の維持が困難
- 道路・農道・橋梁の維持が困難
- 小学校等の維持が困難
- 上下水道の維持が困難
- 住宅の荒廃（老朽家屋の増加）

- ・小学校等の維持が困難
- ・住宅の荒廃（老朽家屋の増加）

(産業基盤)

- 共同利用機械・施設等の維持が困難
- 用排水路・ため池等の荒廃
- 耕作放棄地の増大
- 不在村者有林の増大

- ・耕作放棄地の増大・・・中山間地直接支払制度があるからなんとかやっけていける。
- ・不在村者有林の増大

(自然環境)

- 森林の荒廃
- 河川・地下水等の流量変化の拡大
- 河川・湖沼・地下水等の水質汚濁
- 里地里山など管理された自然地域における生態系の変化

- ・森林の荒廃・・・保水力の低下、山が荒れている。
- ・河川・地下水等の流量変化の拡大・・・水が減っている。

(災害)

- 土砂災害の発生
- 洪水の発生
- 獣害・病虫害の発生

- ・獣害・・・イノシシ

(地域文化)

神社・仏閣等の荒廃  
伝統的祭事の衰退  
地域の伝統的生活文化の衰退  
伝統芸能の衰退

- ・郷土料理については講習会などを開催している。

(景観)

棚田や段々畑等の農山村風景の荒廃  
茅葺集落や生け垣等の集落景観の荒廃  
低未利用地の増加  
ごみの不法投棄の増加

(住民生活)

空き巣被害等の犯罪の増加  
冠婚葬祭等の日常生活扶助機能の低下  
災害時における相互扶助機能の低下  
未利用施設周辺の環境悪化  
空き家の増加

- ・未利用地施設周辺の環境悪化

(6) 集落の維持等に関し、行政に希望する支援策などはありますか (要望・不満など)

- ・儲かる商売が必要
- ・丸森町が行っている一戸建て貸し出し等はいいなあと思っている。  
丸森は大豆や豆腐で有機栽培などもやっている。
- ・お金を出しっぱなしにするだけじゃなくて、お金を入れることも考えていかないとやっていかれない。

#### (資料4)

### 現地調査で挙げられた意見

#### 1. 10月10日(調査1日目)意見交換会で挙げられた意見

##### (1) 山舟生地区のよいところ

|                                     |                                  |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| 活気・熱意がある                            | 問題意識が高い                          |
| 宮城に近い                               | 桜が咲くとききれい                        |
| 山舟生の伝説(7不思議)                        | 気持ちがあったかい                        |
| 7不思議1 一に、一杯清水                       | あんぽ柿の産地                          |
| 7不思議2 二に、あまわらび                      | 2箇所あるサロン                         |
| 7不思議3 三に、風穴深さは知れず 不思議な<br>洞穴 通年18度  | 猪汁と猪の解体ショー                       |
| 7不思議4 四に、新田小舟の堰                     | 和紙工場                             |
| 7不思議5 五つ、色よい相生の松                    | 地元の植物を原料に(楮)                     |
| 7不思議6 六つ、武蔵坊弁慶駒を乗りこむ両足の<br>跡        | 肉牛(牛が放牧されている場所がある)               |
| 7不思議7 七つ、七ツ釜湿田(ひどろた)の蛭<br>(ひる)      | 集落協定できれいに整備されている農地               |
| 長生会(ちょうせいかい)と小学生が共同で植えて<br>いる花壇     | ペットボトル                           |
| 大きなグラウンドがありスポーツが楽しめる                | アジサイが最盛期の時はたくさんあってきれい            |
| ゲートボール場がわいわい                        | 出雲大社(縁結びの神様)                     |
| 羽山神社の山車                             | 銀杏                               |
| 山車祭り                                | 水がきれい                            |
| 羽山そば                                | いわな・やまめが豊富                       |
| 稲が美しい 黄金色                           | 藻屑カニ                             |
| 溪流っぽい個所がたくさんある                      | あゆ・いわな・やまめのひれが苔をとるため川が<br>きれいになる |
| 千手観音                                | 山菜全般が取れる                         |
| きゅうり・さやいんげん・えだまめ(冷涼な気候<br>でピチピチの良質) | 鉱泉(今は個人でやってるが使わせてもらうこ<br>とも可能)   |
| 子育てに良い環境                            | 鉱泉でつるつる                          |
| 活性水素                                | 採石場の地下水                          |
| 縄文土器・矢じり8000年                       | 堤防の上に現在ある石碑は大昔水害があったとき<br>に作られた  |
| 十王堂(名所・旧跡)                          | 地域資源豊富                           |
| きれいな水・空気・緑                          | 大崎八幡宮と関係がある小屋館                   |



|                 |                           |
|-----------------|---------------------------|
| 源氏ホタル           | 武士の手打ち場あった。小手内            |
| 人があったかい         | 化石・石器が出土(5000年前)          |
| 川でかじかが取れた       | 川に蛍が飛んでいる(加老)             |
| 水田のため池          | 愛宕神社 300年の歴史              |
| 火の神・古峯神社(名所・旧跡) | 昔、寺があったらしい地区が「坊」          |
| 潜在的に参加したい人もいる   | 山の上に水がわく、一杯清水             |
| イベントと特産品を結び付ける  | 水田用に人口で作った沼(山舟生地区のものではない) |
| 源氏ホタル           | 境の窪                       |

## (2) 山舟生地区の悪いところ、困っているところ

|                           |                                    |
|---------------------------|------------------------------------|
| 森林の荒廃                     | 鉱泉の調査                              |
| 郷土芸能の存続が難しい               | バスがない。一人暮らしには困る                    |
| 猪が田畑を荒らす(獣害)              | 同年代での飲み会がない(青年団)                   |
| 小学校の維持が困難になる恐れ            | 土手を背負っているために大雨で家が持つていかれる恐れあり       |
| 河川の水量が減少                  | 会社が兼業農家を認めてくれない                    |
| 道路の幅が狭くトラックが移動しづらい        | 交通の便が悪い                            |
| 2キロほどの道が狭く通行量が少ない         | 学校への距離が遠い                          |
| バスの廃止(10/1から)→デマンドタクシー    | 道路が狭い・ダンプが通るのに歩道がない                |
| 国道349号線が何年か一度災害にあい通行止めになる | 企業誘致したけど駄目だった                      |
| 道路が土砂崩れで通れない              | 働く場所がない                            |
| 不在村者が持つてる林の増大             | 住みたい場所に住めない                        |
| 段々畑の傾斜がきつい                | 子どもがいない                            |
| 上下水道の整備が不十分               | 街灯が少なく暗い                           |
| 桑の木が植えたままになっている           | 老人の一人暮らし二人暮らし世帯が多い                 |
| 銀杏は手間がかかる。売れない。           | 介護福祉の問題                            |
| 銀杏がならない・オスの木が多い           | 若い人の生活環境                           |
| 7不思議の案内がない                | アジサイ祭りの衛生面が心配(トイレとか)観光客増やすためには整備必要 |
| 養蚕の衰退                     | 地区の負担が多い                           |
| 養蚕の多角経営                   | 行事が多い                              |
| 砂防ダムの見直し                  | 同じ人間がやる                            |
| 砂防ダムで川魚が寸断される             | 一歩踏み出すためにどうする                      |
| 柿を作る人が減ってきている             | 高齢者が大変                             |

あんぽ柿があくまで個人の収入という考えなので、  
観光等につながらない

### (3) 10年後の山舟生地区のいいところ

|              |                       |
|--------------|-----------------------|
| 小学校の再利用      | アジサイ公園もっと大きくなる        |
| リタイヤ組に期待     | ホテルが増加する              |
| デマンドバスは存続    | 三春から分けてもらった滝桜の孫娘が成長する |
| 紙すきは伝承されるだろう | アスパラ(白野菜)             |
| 和紙づくり続けている   | アジサイが地区全体へ            |

### (4) 10年後の山舟生地区の悪いところ、困っているところ

|                        |                                         |
|------------------------|-----------------------------------------|
| 人口 20%減                | 耕作放棄地の増大・山地化・農地も変わっている                  |
| 大勢の方が亡くなるのでは           | 人口(戸数)減少                                |
| 行事ができなくなる              | 丸森への県道整備が10年後も現状のままだろう<br>(拡張されないままだろう) |
| 各家庭の収入がなくなり年金生活へ       | 5年もたてば小学校が統合される                         |
| 子供がいなくなる               | 空き家が多いだろう                               |
| 住宅が三分の一                | 消防組織の人が現状の半分くらいになるだろう                   |
| 自治会や、～会(会合)等の運営ができなくなる | 山車の維持が困難になる                             |
| 衛生面での行政体制が整わないまま       | 子どもの減少                                  |
| 魅力がなくなるので若い人がいなくなる     | 祭りが続かない                                 |
| 勤め人が福島や仙台へ行ってしまう       | 高齢化が進行                                  |
| 跡継ぎがない                 | 若者の存在感                                  |
| 生態系                    | 作物価格の不振                                 |
| 運動会が盛り上がらない            | 土砂崩れが多い                                 |
| キツネ減少/獣害・イノシシ増加        |                                         |

### (5) 山舟生地区の将来ビジョン

| 住民生活改善アイデア              | 地区外との交流リソースアイデア |
|-------------------------|-----------------|
| サロンを推進して同世代の人とコミュニケーション | 温泉の実現           |
| 高齢者をつなぐ役割の人を作りたい        | 観光地増やしたい        |
| 後期高齢者連携協議会を結成したい        | 桜ウォーキング         |
| 老人クラブ活性化                | 十王堂の売り込み        |
| 連絡体制を整えたい               | 観光資源の売り込み       |

|                         |                             |
|-------------------------|-----------------------------|
| 横のつながりを作りたい             | お金を落としてもらえるような仕組みを作りたい      |
| 公民館で授業(サロンの的なものを作りたい)   | 関所作って通行手形                   |
| 山車のサークルつくりたい            | アジサイ祭りでお金もち(お金をおとしてもらえるように) |
| 地区でできることは地区で対応できる仕組みづくり | みんなで立ち止まる街に                 |
| 地区同士を連携したい              | PR うまくして山車祭りを盛り上げる          |
| 小学校の再利用                 | 観光客を増やしたい                   |
| 皆で世話好きに                 | おもち                         |
| 山舟生で家族と生活を              | 農業体験ツアー                     |
| 人口を増やしたい                | 桜の木を植える                     |
| イノシシ減るのでは・山の手入れもキノコ栽培で  |                             |
| 夢を皆で語り合う場に              |                             |
| 地域に根差した職業               |                             |
| 兼業農家の推進                 |                             |
| 郷土芸能の存続                 |                             |
| お祭りの活性化                 |                             |
| 共同住宅で安心安堵雇用             |                             |
| スポーツを通じて交流              |                             |
| イベントをもっと活性化・若者を         |                             |
| 祭りに若者を                  |                             |
| 女性が力を発揮できる街に            |                             |
| 言いたいことを言える環境作り          |                             |
| 年代の壁を越えて語り合い            |                             |
| 消防団をいかに盛り上げるか           |                             |

| 地区外との交流促進アイデア  | 総合的アイデア      |
|----------------|--------------|
| 丸森へしっかりとした道を作る | 車使えなくても買いもの  |
| 道幅が狭い広くしよう     | 地元で加工できれば    |
| 空き家バンクを作りたい    | 雇用の創出        |
| 安くて安全な山舟生      | 柿渋作って売れるのでは  |
| 体育館を整備したい      | 作物のブランド化     |
| 企業誘致をしたい       | あんぼ柿の二次加工したい |
| 桜の木を植えたい       | 新しい価値をつけてみたい |

|                     |                      |
|---------------------|----------------------|
| 安いインフラを提供したい        | 集落での農作物を育てて直売できるシステム |
| 道路の整備をしたい           | 道に花を植えるか             |
| 急傾斜対策をしたい           | 花いっぱいの町にしたい          |
| 行政との連携(助成金)         | 空き家を利用したい            |
| 建築屋さんと組む            | 実務的なアイデア出せる人ほしい      |
| 住宅地作りたい。タダで(農地つき)   | 山菜                   |
| 駐車場を増やしたい           | 伝統行事の活用              |
| 宿泊型体験施設を設置 (小学校を想定) | 芸能部創設                |
|                     | 土器を生かして先生が現地で歴史授業    |
|                     | みんながおしゃれな街に          |
|                     | お嫁さんを増やしたい           |
|                     | 川沿いにアジサイを            |
|                     | 森のレストラン              |
|                     | 花で地域をコーディネート         |
|                     | 楽しみながら花づくり           |
|                     |                      |
|                     | お金をかけない地域づくり         |
|                     | 人口増やしたい              |

## 2. 10月11日(調査2日目)意見交換会で挙げられた意見

### (1) 地域住民でできること

|                     |                                                        |
|---------------------|--------------------------------------------------------|
| ①毎日使えるサロンを作りたい      | ②地区に住む若者を巻き込みたい                                        |
| デマンドタクシーの待合所も兼ねる    | 若い人がイベントを企画する                                          |
| 農作物の販売もする           | 12地区若者連携協議会を結成する                                       |
| 公民館・分館の集会所(7つ)を改装する | 若者を親方(トップ)にし、年配の方が補佐役に回る                               |
| ③地域資源を活用したい         |                                                        |
| アジサイをドライフラワーにして売る   | あんぼ柿の2次加工する際に著名な人にプロデュースしてもらう<br>(今も料理の先生に意見伺ったりしている)  |
| アジサイの盆栽を販売する        | 森のレストラン(料理人の目星は付けている)                                  |
| ぎんなん、大根、梅干し         | みそ豆(減反地に植えるよう奨励されている)                                  |
| さやえんどう、さやいんげん       | 風車発電                                                   |
| あんぼ柿、きゅうり、山菜        | 羽山からパラグライダーでとんで、千本松を着地点にしてはどうか<br>(ヘリポート作りは気流の関係で断念した) |

|                                             |                      |
|---------------------------------------------|----------------------|
| チームを作って競争形式で加工してみても<br>(チーム羽山改善グループという組織あり) | 和紙のブランド化 (名刺などよいのでは) |
| 地産地消                                        | ホテルの里の米として売り出す       |
| 他の地区・大学との共同でお弁当を作って販売                       |                      |

(2) 行政の力を借りてできること

|              |                   |
|--------------|-------------------|
| 丸森町への道路を拡張する | イノシシの飼育許可を出してもらう  |
| 風車発電         | 和紙の名刺を使ってもらうようにする |